

書簡文

大凡形於兩間者。日月星辰山川草木。皆我師也。如名山大川。清淑秀特之氣所凝焉。而造物者最盡巧焉。故文學章者。最可以為師焉。夫山之左右相顧者。文之照應也。水之分為兩派者。文之雙關也。山之或起。或伏。忽大。忽小。文之頓挫起伏也。水之轉而折。屈而曲。文之曲折也。仰觀於高。俯察於深。莫一非文章矣。世之人。知出之於心而書之於紙者之為文。而不知山水亦有文也。子厚之文。峭峻。東坡之文。一瀉千里。則峭峻之山。即一篇子厚之得意文也。一瀉千里之水。即一部東坡集也。是以。觀名山大川。即子厚東坡之佳處備焉。不獨子厚東坡佳處備。古今名家之佳處。皆備焉。是故欲學文章者。莫如師名山大川也。而今之游四方者。雖逢名山大川。漫然過之。逢師而不師焉。而別求其所謂師者而學焉。故其文遂不能巧也。蘇轍云。百氏之書。雖無所不讀。然皆古人之陳迹。不足以激發其志氣。故決然捨去。求天下奇聞壯觀。過秦漢之故都。恣觀終南嵩華之高。北顧黃河之奔流。可謂先獲我心矣。余之持此說也。久矣。而未敢告人也。吾友公素。博學好文章。蓋其志斬至於古之立言者也。今茲十月廿一日。將游京師。吾以為公素而後可以告矣。既告。又謂之曰。以君之才之美而胸畜芙蓉之雪。腹貯東漢之潮。發為文。著為章。

斐然。炳然煥然煥々然。及其歸也。吾知其無敵矣。往哉。

時年二十一

積文

枝公素京師に遊ぶを送る序

大凡は兩間よりの形に、日月星辰山川草木みな我が師なり。名山大川の如く清淑秀いで特に氣凝

す所なり。造物最も巧を盡す。

故に文章を學ぶには、最も師と為す可し。夫れ山の左右を相顧りみて文の照應させるなり。水はこれを分けて兩派を為す文の雙關なり。山これ或は起ちて或は伏して、忽ち大きく忽ち小さく、文これ頓挫して起伏なり。水これ轉りて曲折なり。於て高きを仰ぎ觀て俯せて深を察す。文章一つに非らざる莫れ。世人知るはこれ心により紙に書いて文に為する。山水また文有るも知らず。

子厚の文峭峻 東坡一瀉千里則ち、峭峻の山即ち一篇子厚得意の文なり。一瀉千里の水即ち一部

東坡とうはくの集しゅうなり。是れ以て名山大川なみさんたいせんを觀かんて即ち子厚しこう東坡とうはくの佳處たいとを備そなわる。子厚しこう東坡とうはくの佳處たいと備そなわる獨ひとりりならず。古今ここんの名家佳處なみせんみな備そなわる。

是れ故に文章は學まなばんと欲ほす名山大川なみさんたいせん師しに如ごとかず莫なれ。今の四方しやうほうに遊あそぶは、名山大川なみさんたいせんに逢あわずと雖いえども。漫然まんぜんと之れを過すぎ師しに逢あいて師しを知らず。しかも別わかれて師しの謂い所じゆを求もとめて學まなび、故ゆゑに其の文遂ぶんすいに巧たくみに能あたはず。蘇轍そてつは云いう、百氏ひやくしの書しよを讀よまざる所無なしと雖いえども、然しかりて皆古人けいじんの陳ちんべた迹しきその志氣しきを激發げきはつし以て足たらず。故ゆゑに決然けつぜんと捨すて去さり天下奇聞てんかきぶん壯觀そうかんを求もとめて、秦漢しんかんの故都ことを過すり恣しに終南しゆうなん嵩そう華かの高たかきを觀かんて、北きたに黃河かうがの奔流ほんりゅうを顧こる、我われが心こころに先まず獲えて謂い可べし。余よの此こゝの説せつを持もつて久ひさしきかな。未なだ敢あて人ひとに告つげず、吾われが友ともの公素博學こうそはくがくにして文章ぶんしやうを好このみ、思おもうに其の志しを至いたらしめるは古ふるよりの立言たつげんは斬きしなり。今茲こんしに十月廿一日じゅうがつにじゅういちにち、將まさに京師きやうしに遊あそばんとす。吾われれ以て公素こうそに告つげる、既すでに告つげる又た之れを謂いつて、ここに君の才さいの美うしきを以て芙蓉ふゆふの雪ゆきに胸奮きこほし、東漢とうわんの潮うしほを腹貯はらたくし發はして文ぶんに為なさん。著章しやくしやうを為なし、斐然ひぜん、炳然へいぜん、烺然りやうぜん。烺りやう々りやう然ぜん。其そのの歸かへるに及およんで。吾われれ其の敵てきなしや往むかくがよし。

語釈

枝公素しこうそ 玉乃公素 又は枝多門、五竹の藩校養老館での学友、維新後官につき世履と名乗り、大審院長に栄進、明治の法曹界の重鎮として
 今大岡の名を欲しいままにした。没後の明治二十二年七月に「五龍先生文詩」が刊行された、其の文中に（藩老某君遊学熊本序）に南部五竹の記述あり。
 京師きょうし 天子の都、京都。大凡おおよそ 大体、おおまかに。兩間りやうかん 双方の間。日月にちげつ 太陽と月。星辰せいしん 星、星座。星宿せいしやく 山川さんせん 山と川。草木さうもく 草と木。名山めいざん
 有名な山。大川たいせん 大きな川。清淑せいしゆく 清らかで淑やか。特秀とくしゆう 特に秀でる。凝ぎやう 眼を凝らす、じつと看る。雙關そうかん 漢詩、文章を作る時の修字法。頓挫とんさ
 行き止まる、挫ける、転じて文章や音楽の勢いが急に変わる。起伏きふく 起きたり伏せたり、凸凹。俯ふ 伏せる。莫な ない。子厚しこう 人名。峭峻せうけん 山が
 高く峻しい、気高く優れてる。東坡とうぱ 湖北省の一名、蘇軾が流されて其の地に在り東坡居士と号した。一瀉千里いつせせんり 遠浅の海岸で潮が引けば露れる処、
 限りなく広い入り江。雖いふ けれども、たとい。漫然まんぜん 取り留めのないさま、注意しなさま、そぞろに。蘇轍そてつ 蘇軾の弟、兄の軾を大蘇、弟の轍を小
 蘇と言つ。百氏ひやくし 百人の学者。陳迹ちんせき 跡を述べる、自分の考えの跡を述べる。志氣しき 志と気力。激げき 激しく。決然けつぜん きつぱりとしたさま。奇聞きぶん 不思議
 な、珍しいこと。壯觀さうかん 大きな立派な見物、盛んな眺め。秦漢しんかん 秦と漢。故都こと 古い都。終南しゆうなん 陝西省にある山、南山、秦山とも言つ古寺や
 名勝が多い。嵩しゆう 河南省の名山、嵩山と華山。黄河わうが 中国第二の大河。奔流ほんりゆう 迸る流れ、急流。獲くわく 捕獲、獲る。恣觀しやく 欲しいままに観る。博學はくがく
 広く学ぶ、広い学識がある。芙蓉ふふう 芙蓉の花。富士山。東漢とうわん 東方の海。潮しゆう 潮。汐しやく 著章ちやくちやう 文章を著はす。斐然ひぜん 彩あや 彩があり美しい。炳然へいぜん 明らかな、
 明るいさま。焜然くわんぜん 燃えて明るい。焜々然くわんくわんぜん 慈あや 慈しむさま、眼をかけるさま燃えて明るいさま。

28 送一宮子德之浦賀序

夫洋夷之采頤乎我東方者。久矣。或請互市。或乞米穀。以覘我虛實。而以我無撓屈之色也。未有敢恣兇悍者也。今茲嘉永六年癸丑夏日。洋夷以巨艦十數艘來。覬覦乎我浦賀之濱。泉岳寺。在浦賀之地。幕府命我公。遣兵守焉。吾公使臣某々。友人子德亦與焉。將行。南子酌酒盈觴。而屬之曰。夫浦賀者。我咽喉之地也。洋夷不至他處。而至此地。蓋彼既熟乎吾地理。其志豈易測哉。一旦有緩急。子其勉旃。我東方雖國富兵強。而昇平二百年于今矣。士民未有實歷戰鬪之場者也。以未實歷之兵。富彼實歷之兵。其勢極難矣哉。况彼火器之精巧。諸邦之所不及。方其巨礮震天。大煩轟地也。霹靂一聲。百軍兵。悉為粉壘矣。我士雖勇。我民雖猛。吾恐不能不其膽為之落也。子將何術禦之。子博學而多識。必有臨機應變之術。一旦有緩急。子其勉旃乃酌而歌曰。西洋醜虜何貪饕。一葉遙度萬里濤。休怖犬洋如虎狼。休祈風伯使其勞。醜虜若敢恣陸梁。百萬醜虜一時麀。夕畢洗刀東海水。電光依然日本刀。

時年二十三

釈文

二宮子徳之浦賀に送る序

夫れ洋夷やうい之我が東方とうほうを朶頭者だいてい。久く矣。或は互市ごいち請こい。或は米穀まいこくを乞こい。以て我が虚實きよじつを覘てん。而て我に撓屈たうくつの色無なし以て也。其の兇悍きようかんを敢恣かんし者有あり未だ也。今茲こゝに嘉永六年癸丑夏日。洋夷巨艦きよかん十數艘すうそう以て來る。我浦賀の濱を覬覦きゆ。泉岳寺。浦賀の地に在り。幕府我公に命めいじ。兵を遣やり守る。吾公臣某々を使う。友人子徳亦共に。行く將に。南子酒なんしを酌觴しゃくじやうを盈えいす。而て之屬しよへく曰く。夫れ浦賀者。我が咽喉いんこうの地也。洋夷他處に至らず。而て此地に至る。蓋彼既に吾地理を熟。其の志豈測あにり易し哉。一旦緩急いつたんかんききゆう有あり。子其の旃勉せんむ。我東方國富み兵強と雖いえども。而て昇平しやうへい今二百年矣。士民戰鬪の場實歴者有ある未だ也。實歴じつれき未だの兵以て。彼の實歴じつれきの兵に當る。其の勢い極て難矣哉。况彼の火器かきの精巧せいこう。諸邦しよほうの及およぶる所。其の巨礮きよほう方に天を震わす。大煩地に轟へきれきく也。霹靂へきれき一聲。百の軍兵ぐんびやう。悉く粉壘ふんさいと為す矣。我士勇と雖いえども。我民猛と雖いえども。吾恐る能はず其の膽たん之為す落す也。子何の術じゆつで之禦將ぎよに。子博學しはくがく而て多識しき。必ず臨機應變りんきおうへんの術有あり。一旦緩急いつたんかんききゆう有あり。子其の旃勉せんめ。乃酌しやく而て歌曰く。西洋の醜虜しゆうりよ何に貪饕たんとう。

一葉遙に渡る萬里の濤。犬洋の怖虎狼の如く休す。祈る風伯其の勞休す。醜虜若敢恣陸梁。百萬の醜虜一時に麀。麀畢刀を洗う東海の水。電光依然日本刀。

時年二十三

語釈

洋夷ようい 西洋の戎夷。東胡とうこ 東方とうほう 東の方。浦賀うらが 朵頤たいい 顎を下げ物を食べようとするさま。互市ごしち 市場。貿易ごうい 請い。要求べいごう 米穀まいこく 米や穀物。虚實きょじつ 嘘か真。胡こ 窺う。覗く。撓屈たうくつ 撓み屈する。兇悍きょうかん 凶悪で精悍。敢恣かんし 敢えて欲しい儘にする。巨艦きょかん 巨大な艦船。十數隻じゅうすうしゅう 十數隻。覬覦けいぐん 身分不相応な琴御望み願う。遣りや 派遣。子徳しとく 二宮子徳。小太郎。梅花。超海。浦賀に出張の時に勝海舟につき洋式兵術を学ぶ。南子なんし 南部五竹。酌しやく 酌む。觴しやう 觴、盃。酒杯をあげる。盈えい 盈す。満ちる。屬しやく 委囑。頼まれる。中間。同類。咽喉いんげう 喉もと。蓋けだし 思つに、なんぞ。雖いひなほ けれども、たとい。豈あに ねがう、どうして、それ。一旦緩急いつたんかんきゅう 一度國に大事が起これば。子し 子徳。旃せん 周旋。昇平しやうへい 平和、世の中が穏やかに治まっていること。太平。實歴じつれき 實際に経験した。火器かき 銃や砲。精巧せうこう 精密で巧みな。諸邦しよほう 諸國。巨礮きょたう 巨大な砲。方にあた 丁度その時に。霹靂へきれき 急に激しく鳴る雷音。雷鳴。軍兵くんべい 軍や兵。粉糶ふんざう 粉砕。膽たん 肝。胆力。禦ご 防御。防く。多識たしき 知識が多い。臨機應變りんきおうへん その場に臨み状況の変化に応じて、物事をつまく処理する。醜虜しゆうりよ 外国人を卑しんで呼んだ言葉。貪饕たんたう 貪り喰う。度るわた 渡る。萬里ばんり 一万里。濤たう 波濤。犬洋けんよう 外国人を卑しんで呼んだ言葉。怖おそ 怖し。虎狼ころう 虎や狼。風伯ふうはく 風の神。神風。陸梁りくりやう 暴れ回る、欲しい儘に振る舞う。麀あう 皆殺し。畢ひつ 悉く。東海とうかい 東の海。電光でんこう 稲妻。依然いぜん 矢張り、元のまま。昔を恋い慕うさま。樹木が茂るさま。

29 送帆足子德歸豐後

大丈夫。不得行道於一世。則當立言於千載。行道於一世。其本志也。立言於千載。不得已也。故古之立言也。多出於困阨輒軻流離顛沛之餘。文王拘於羗里。而周易作。孔子不用於時。而脩詩書。作十翼。屈平被讒。而賦離騷。老聃憤世。而有道德經。國語出失明之後。史記成於腐刑之餘。此數君子者。道雖尊乎。言雖美乎。方其在世也。抑亦可謂窮矣。余小也孤。鞠養姑氏。纔得存活。姑氏多蓄書。日夕讀之。略通大意。竊不自揣。有慕乎古聖人之道焉。亡何。姑氏卒。於是乎。身無所依賴。朝摘藜藿。以充饑。夕集螢雪。而讀書。以至於今日矣。一日奮然以謂。世之論閎閎也尚矣。處今之世。欲行古之道。是北轅越週耳。况余犬馬之齒已及而立。今而如此。則前途可知矣。今我不自為圖。白首治經。兀夕守陳迹。生為山中之餓士。死為無名之鬼。則徒自苦耳。於是乎。欲周覽名山大川博交磊落魁偉之士觀風於諸國有所述作以倣古之立言者。歲之二月。遂為鎮西之遊。邂逅豐後帆足子德後肥鞞邨書屋。子德。為人温厚。有才藻。每文章成輒示余。請是正。久而好情愈篤。歲之五月。將歸鄉。既告別。又求余文辭。余乃告之曰。余也無求於世者。而子則有求於無求之余。自非求益之厚焉。能如此哉。惜哉。余力薄才拙。不能酢子之求也。

雖然。子之請。豈可默而止哉。我聞日出。世不乏於明良。子之先人。西嶂先生。以博學著作。名于天下。亦嘗被登庸執政。子春秋鼎盛。勤而不已。必有所成。天欲使子行道於一世。一家出兩相。未可知也。天欲使子立言於千載。一家出兩儒。亦未可知也。若得行道乎。其施治如先人而可。若其不行也。退而守文。如先人而可。遇不遇命也。無辱先人斯可。余之有志于立言。子業已知之。其成與不。雖余不能知也。子之有志于行道。余業已知之。其得與不。雖子不能知也。然則余與子不可不自愛惜焉。但恐他日。余有所愧于子。今者余之告子。止于此。欲登彥山探耶馬之溪久矣。其遊也。不在今秋。必在明春。必以子為東道之主。果得相見乎。猶將欲有所告子。々其待之。無限感慨。讀之滲人肺腑。行文之妙。如入窈窕之谷聽幽眇之音。真是廬陵

真訣

積文

帆足子德豊後に歸るを送る序

大丈夫。道は一世に於いて行つことを得ず。則ち言は千載よりの言を立てて當り。道には一世により

行つ其本の志なり。言は千載せんざいより立てて已に得ず故に古の立言なり。困こん、輓かん、輶きう、流りう、離り、顛てん、沛ぱいの餘に
出ずる。羗里きやうりに於て文王拘こえ周易しゆい作す。孔子干かん時に用いず詩書ししよを脩おほめて十翼じしゆいを作す。屈平くつへい讒そしられて
離騷りしやうを賦ふして老聃らうたん憤ふん世道せだう徳とくを經けいる有り。国語こくご失明しゆめいの後にのち出ずる。史記しき腐刑ふけいの餘のちりに成す。此の數君子
は道は尊そんしと雖なほも、言は美みなると雖なほも方に世に其れ在りて抑おさそも亦た窮きゆうを謂いつ可べし。余は小おさときよ
り孤ひり。姑氏こしに養やしやわれて鞠そだつ。纒わすかに存活そんかつを得る。姑氏こし書しよの蓄たくえ多く日夕にちせき之を讀よむ。略はば大意たいぎを通
じ。竊せしいなや自みづから揣はかりて古聖こせい人の道みちを慕ほう有りて。心は何んぞ姑氏こしの卒そつ是れ於て身みを依よ頼らんする所無
く。朝あさに藜藿れいかくを摘つんで以て饑うえに充あて、夕ゆふに螢雪けいせつを集めて書しよを讀よむ以てここに今日けふに至る。一日いちにち奮然ふんぜん
と謂いつ。世よの閥閥ぼつぼつを論ろんじ尚なほお今の世よに處おほして古道こだうを行なわんと欲ほす。是れ北轅ほくえん越週えつしゆう。況いはんや余あ犬馬けんま
の齒は己おのに立たつに及およんで此この如ごとし。則すなはち前途ぜんず知しる可べし。今我れいなや自みづから圖ずるを為なさん。白首はくしゆ經けいを
治ちめて兀々じつじつと陳迹ちんせきを守まもる。生なきて山中さんちゆうの餓士がしを為なさん死しして無名むめいの鬼おにに為なさん。則すなはち徒ただらに自みづから苦
しむのみ。是れに於て名山大川めいさんだうせんを周覽しゆらんせんと欲ほす、博はくく磊落らいらく魁偉かいゑいの士しに交まりて諸國しよこくの風かぜを觀みて述なべ作
さんを有あす。

倣なまらいて古の言に立ち歳はこれ二月遂ちんせいに鎮西の遊を為す。豊後帆足子徳ぶんご ほめしとくに逅あいここに肥後の鞆邨書屋いそに
避めくりあつ。子徳人温厚さいそうに才藻を有し。文章成すを毎つねに輒いつも余に示す。是れ正に請う久しく好情愈いよいよ篤あつ
く。歳これ五月將に郷に歸り。既に別れを告げ又た余の文辭を求める。余は乃ち之れに告げて曰く。
余また世に求めるもの無し。子徳則ちこれ余の求め無に於いて求め有す。これ厚く求めるに非らず能
く此の如し哉かな。惜しむ哉かな。余力薄く才拙子徳の求めに酢むくる能はず然りと雖も。子徳の請い豈黙すべ
きか止める哉かな。我は聞く日出ひじにて明良に世は乏しからず。子徳の先人西嶮先生博學著作を以てここに
天下に名す亦た嘗て執政に庸に登せらる。子徳しとく春秋しとくしゅんじゅう鼎かに富み勤めて已おのれず必ず成す所有り。天は
道を一世より子徳に行なわ使しめんと欲す。一家は兩相りやうしやう出て未だ知る可からず。天は千載せんざいより立言子
徳使しせんと欲す。一家兩儒りやうじゆに出て。亦た未だ知る可からず。若し道を行なうを得て其の先人の如く
施して治む可し。若し其れ行はず退いて文を守る先人の如くに可し。遇めいう遇めいはずは命めいなり。先人を辱はず
かしめること無く斯かくも可よし。

余の志ここに立言有り。業は已に知るは之れ其の成いなる不なと雖も余は知るを能はず。子徳の志有るをこ

ここに道を行ない余の業は已に之を知る。其れ不^{いな}と得る子徳と雖も知るを能はず。然して則ち余と子徳と自から愛惜は可からず。但だ恐るは他日余は子徳に愧^{はず}かしめる所有り。今余之れを子徳に告げてここに此れを止める。彦山に耶馬^{やば}の溪^{けい}を探りて登らんと欲す久しきかな。其の遊今秋在りや不^{いな}や必ず明春に在り。必ず子徳を以て東道の主^しを為す。果して相見を得ん猶お將に子徳に告ぐ所が有るを欲す。子徳之れを待たれよ。感慨限^{かんがい}り無く之れを讀んで人肺腑^{じんはいふ}に滲^{にじ}み。文の妙を行ない。窈窕^{うけい}の谷に入り幽眇^{ゆうびょう}の音を聽かん。眞^{まこと}に是れ廬陵の眞^{まこと}に訣れる

語釈

帆足子徳^{ほんそくしとく} 日出藩家老帆足万里の養子、百九十石を与えられた、藩學訓導、五竹の木門時の若き友人。豊後^{ぶんご} 豊後の日出藩大分県。千載^{せんざい} 千年。困厄^{こんがく} 困り破れる、崩れる。輶軻^{かつか} 車の行き悩むさま。流離^{りゅうり} 流れ離れる。顛沛^{てんぱい} 躓き倒れる、咄嗟の時。文王^{ぶんおう} 周の文王。羌里^{きやうり} 夷、中国西部の蛮族。拘^{こう} 拘留、拘る。周易^{しゅうい} 五經の一つで易經。脩^{しゅう} 修める。十翼^{じゅうよく} 易經の本文を詳しく解説した物。老子^{らうじ} 老子の名。抑^{おさ} 抑、抑留、抑える。姑氏^{こし} 姑父の姉妹、伯母、叔母。纒^ま 僅か、少し。鞠養^{きよく} 養い育てる。竊^{せつ} 密かに。自揣^{じすい} 自ら推し量る。卒^{そつ} 没す、死ぬ。藜藿^{れいこく} あかぎの葉と豆の葉、粗食のこと。饑^う 飢饉。螢雪^{けいせつ} 苦心して勉学に励むこと。闕閱^{けつえつ} 功績と経歴。宋以後功績を書いた二本の柱を門前に建て左に柱を闕右の柱を闕と言つた、立派な家柄、門閥。北轅越過^{ほくえんこくわ} 車の長柄を北の轅に向けて南の越の國に行こうとする、志と行動が一致しない。白^{はく} 建白、上位の人に意見を述べる。首經^{しゆけい} 易經の卷首。兀々^{くつくつ} 一心不乱に努力する。陳迹^{ちんせき} 跡を追ひ述べる。餓士^{がし} 飢餓の士、貧乏な士。周^{しゅう} 周く、広く

全て、隅から隅 名山大川めいざんたいせん 名高い山や大きな川。 覽らん 観る。 磊落らいらく 心が大きく、小事に拘らない。 魁偉かいゐ 優れて偉い人。 倣なまう 人に倣い真似る。 鎮西ちんせい
 筑紫、九州。 鞆いんぼ 木下鞆。 邂逅かいこう 思いがけなく出会う、喜ぶさま。 才藻さいそう 才知と文藻、詩文の才能の豊かなこと。 輒てんじつ 即ち、忽ち動かない。 愈篤ゆどく
 しいよいよ篤く。 薄才はくさい 才に乏しい。 雖いえど けれども、唯 此れ。 子し 子徳。 春秋しゅんしゅう 春秋時代。 鼎富ていふ 贅沢な暮らし。 天道てんどう 天の道。 兩相りょうそう 助ける、
 補佐する、二人の家老。 千載せんざい 千年。 兩儒りゅうじゆ 二人の儒者。 遇ぐ 幸せ。 不遇ふぐ 不幸せ。 命めい 運命。 辱じやく 辱め、恥ずかしい。 屈平くつへい 屈原。 讒ざん 讒言、悪口
 を言つて告げ口する、誹る。 離騷りせう 戦国時代、楚の屈原が王から信任されない憂いを述べた。 斯し 此の、是、即ち。 感慨かんがい 深く感じて心が奮いたつた流
 嘆いたりする、感動して憤激する。 肺腑はいふ 肺腑、心の奥底、急所。 窈窕ようてう 山水、山路、宮殿などの奥深いさま。 幽眇ゆうめう 小さく遙かに寂しい廬陵 地名、
 宋の歐陽修、文天祥。 眞訣しんけつ 眞の道。 眞の訣わか 眞の訣れ 本当の別れ。

嗚乎。窮之甚。而可痛。志之篤。而可憐者。吾佐藤某耶。某自後豐。負笈。短褐蕭然而來。受業於鞞村木先生。々々門人。不為少。某日為之執爨。以自給。其爨也。手卷。立竈前。且讀且爨。日夕。則携卷出簷下。至字不辨而止。余每見之。悲痛感激。為之泣下。噫。夫世之。目不知丁。不辨仁義道德為何物者。往々坐高堂而重茵。食甘滋。飲醇釀。燕玉滿房。糸竹沸堂。宴安逸樂。以度日。是何脩而然也。而使有志如某者。窮乏至于此極者。亦獨何哉。不知大道果喜斯道耶。果不喜斯道耶。將憐若人耶。將不憐若人耶。吾甚惑焉。孟子曰。天將降大任於是人也。必先苦其心志。勞其筋骨。餓其體膚。空乏其身。繇是觀之。貧賤憂戚。焉不知以玉汝成乎。某勉哉。父母之咎其子。非惡而然。恐其為不善人也。不與之甘甜味。恐其生疴病也。非不欲使其食之也。故與甘甜味以止啼廢咎。而長其傲者。是姑息之愛。而非愛之至也。今天之於某。豈亦愛之至者。非耶。某勉哉。同病相憐。人之情也。余也。世之所謂窮人也。以值窮人。何不之憐耶。况某之窮。而志之篤乎。假使予多財乎。吾衣于汝。吾食于汝。俾汝遂其志乎。千金百鎰。亦所不吝焉。獨若予之窮而又窮。我躬不閱乎。某之歸也。不能以為購。乃贈以詩曰。

鬱々松柏。雪霜寒之。困于疾藜。其享有時。彼以其富。我以吾義。金石相和。歌者是誰。

釈文

佐藤文水豊後に歸るを送るの序

嗚乎、窮きわまりて之れ甚し志の篤あつき痛む可し、憐あわれむ可しや佐藤某それがし、某し豊後より笈きゅうを負い短褐たんかつしやうぜん蕭然として來る。鞞いそん村木先生より業を受けて、先生門人少なからずを為す。某日之れを為すかまと鞞つに執きて以て自給し、其の鞞かまじの竈前そうぜんに立ち巻を手に且つ讀み且つかし鞞かぎ、日夕則ち巻たずさを携えて簷下えんかに出て、字を辨わけずして止どまりて至く。余は之れを見る毎たびに悲痛感激して泣に下る。

噫ああ 夫れ世の目の丁ちやうを知らず、何物も為さん仁義道德も辨わけず。往々にして高堂こうどうに坐して茵しきものを重ね、甘滋醇釀かんじじゆんじやうを飲いず、燕玉房えんぎよくぼうを満みす、糸竹堂しちくに沸かして宴うたげに安逸樂あんいじつしむ。以て日度りて是れ何んぞ脩おのめて然り、某しの如く志有りて使せしむ、窮乏きゆうふしく此の極に至り亦た獨り回かえる哉。斯の道の大道果す喜びを知らず果して斯の道を喜ばず、將に若人憐きやくしんあわれむべし。吾は甚だ惑まどつ孟子曰く、天は將に大

任是の人を降せんとす。必ず先に其の心志の苦しみ、其の筋骨の勞れ其の體膚の餓え、乏しく其の身に空しく是れしたが繇したいて之れを觀て、貧賤憂戚汝成りて玉不いなを知れ。某し勉める哉。父母の咎其の子悪しきに非らず然れども、善人を為さず之れ甘甜かんてんとせず、疴病かんにょうの生ずるを恐る具ぐに之れを食して欲せずずに非らず。故に甘甜かんてんと以て咎ちすい筆を廢して啼くを止どめ、長く傲あじるは是れ姑息こそくの愛にして愛の至りに非ず。今天の某しに愛の至るは勉むなり。

同病相憐むは人の情なり。余なり世の謂おせう所の窮人きゆうじんなり。以て窮人きゆうじん 窮人に値して何んぞ憐れまあわず、況んや某しの窮きゆうは志の篤あつにして、假にも多財たたいを予え使めて、吾が衣を汝に吾が食を汝に其の志を遂げて俾しむ。千金百鎰せんきんひやくいじゆ亦た吝おしまず所獨り窮きゆうにきゆうの若く、我が躬けみは閱けんせず某し之れ歸るなり。贖はなむけに為すことも能はず。ここに詩を以て贈る。

鬱々松柏
鬱々たる松柏うつつひやく

雪霜寒之
雪霜 之れ寒しゆきしも

困于疾藜
困くしき疾藜しつれい

其享有時

其れ享める時 有り

彼以其富

彼は其の富を以て

我以吾義

我は吾が義を以て

金石相和

金石 相和して

歌者是誰

歌うは是れ誰ぞ

語釈

後豊ごほう 豊後。窮きゆう 窮まる、困窮。篤あつ 篤く 人情が篤い、誠意が有る。憐あわれ 憐む 憐憫。笈あし 笈、笈箱、書物等を入れて背負つ竹製の箱。短褐たんこつ

ぬのこ、短く荒い粗末な着物。蕭然しょうぜん 物寂しいさま。木先生もくせい 木下鞆村。纒執まんしやく かしく、炊く、飯を炊く、かまど。竈かまど 竈。携たづな 携え 携行、持

って。簷下えんか 軒下。辨べん 辨せず 弁えず、知らず。泣下なげ 涙を流す。噫あ 嗚呼。目丁めぢやう 物事の筋目。仁義じんぎ 仁、親愛の心、義、道理に適つこと、道德の総

称。道德たうてく 人のふみ行つべき正しい道、道義。往々わうわう つねずね、屢々、時々、時として。高堂こうたう 立派な表座敷、父母、他人の家の敬称。茵いん しとね、寝

床、敷物。甘滋かたじ 甘く滋養のあるもの。醇釀じゆんじやう 良く熟した味の濃い酒。燕玉えんぎよく 玉に似て非なるもの。燕えん 燕、酒盛り、くつろぐ。房ぼう 部屋。糸竹しそく

琴の類と笛の類。宴安えんあん 心がくつろいで楽しむ。逸樂いっらく 気儘に楽しむ。日度にちど 日に何度も。惰おだ 修める。窮乏きゆうぱふ 乏しく困窮する。惑まど 迷つ。斯道しそ

此の道、聖人の道、その人が携わつて居る技芸や学問の道。筋骨きんこつ 筋肉と骨。劳いたは 大切に、自愛。體膚たいふ 身体と皮膚。餓が 飢える。繇ゆう 揺れる、よ

っつて、従つ、遥か遠い。貧賤ひんけん 貧しく賤しい。憂戚ゆうせき 憂い傷む。筈はず むち。甘甜かんでん 甘い物。筆すい むち。筆すい 筆。多財たさい 分限者、金持ち。俾ひ しもへ、

召使い、せしむ、させる、従つ、睨む、横目で観る。千金せんぎん〓千両。百鎰ひゃくいっ〓百四十兩。吝りん〓ケチ、吝嗇りんしやく。躬み〓身体。閱えつさず〓看ない、顧みない。贖じん〓饒、贈る。鬱々うつづ〓鬱蒼と。松柏しょうはく〓松と柏。疾藜しつり〓はまびし、藜草、はまびしを象かたつた鉄又は木の武器、忍者用。享きやうす〓享受、受ける。金石こんせき〓金と石。相和あひわす〓調和。

31 送海賀某歸秋月序

海賀某秋月人也。有學問。喜文章。旁精于拳法。余與之相識于後肥。蓋魁偉之士也。某之歸鄉也。過余乞一言。余乃告之曰。子好拳法乎。吾以拳法論之。邑之人。川子道。嘗語余云。藤井某。妙于拳法。立人于壁後。隔壁擊地。立者應聲而仆。少頃。又擊地。仆者忽焉甦。僕異之。求聞其術。語僕以赤手殺甲士之法。其法令人被擊。信手拊之。則死。又信手拊之。則活。余聞之曰。神矣哉。技也。嗚乎。是感而應之道耶。若信斯言也。茫茫之天。可以感焉。冥々之神。可以格焉。而況於人乎。感天有道曰。誠矣而已。格神有道。曰誠矣而已。動人有道。曰誠矣而已。天之不感。誠之不至也。神之不格。誠之不至也。人之不動。誠之不至也。詩曰。維此文王。小心翼翼。昭事上帝。聿懷多福。言文王盡誠而天感也。又曰。列文辟公。錫茲祉福。言辟公盡誠而神格也。書曰。祇載見瞽瞍。夔々齊栗。瞽亦允若。言舜盡誠而動也。由是觀之。至誠而不動者未之有也。誠其可不盡乎。嗚乎。余之所精者道也。故假技以明道。子之所精者技也。且因技而求道。精之精之。又重精之。可以通神矣。求之求之。又重求之。可以達道矣。嗚乎。是技也。而進乎道。

文亦有赤手殺甲士之手段

釈文

海賀某し秋月に歸るを送るの序

海賀某し秋月の人學問有りて、文章を喜しみての旁らここに拳法に精し。余は之れ肥後に相識る。謂うに魁偉の士である。某し郷に歸る一言乞うと余を過ぎる。余はそこで之れを告げる。

子は拳法を好み。吾に拳法を以て之れを論ず。邑の人川子道嘗て余に語る。藤井某しの拳法の妙は人や壁の後に立ちて、壁を離れて地を撃ち立ちて聲に應じて仆れ、暫くして又た地を撃ちて仆れて忽ち甦がえる。僕は異しく其の術を聞き求める。甲士殺しの法を赤手で僕に語る、其の法人に令けて堅く手に信せて之れを拊つ、則ち死す又た手に信せて之れを拊つ則ち活かす。余の聞く之れが神の技か、嗚乎是れ感じて應に之れ道若し斯の言を信じて、茫々の天以て感ず可し。冥々の神以て格す可し、況んや人に於て天に感ず道有りて誠かな、己に神に格す道有りて己に誠なり。天も感じせず誠も至らず、

神は格さず誠も至らず、人之れ動かず詩ここに。

維此文王

此の文王を維ぎ

小心翼翼

小心 翼翼たり

昭事上帝

昭らかに上帝を事として

聿懷多福

聿 多福を懷つ

言つ文王 誠 盡きて天 感ずなりと。又たここに。

列文辟公

辟公 文に列ねて

茲祉福錫

茲に祉福を錫わる

言つ辟公は誠を盡くして神格す。書して祇だ載せて警賔を見る。夔々として齊栗す警亦た允若言つ、至誠動かずして未だ之れ有りて誠は盡せず可き、嗚乎、余の精けし所道なり。故に技を假て以て道を明かす。子はの精けす所は技なり。且つ技に因つて道を求める。精けの精け又た重くして之れを求め道に達して以て可し。嗚乎、是れ技なり、そして道に進む。

亦た赤手で甲子殺しの手段を文にする。

語釈

海賀某かいが 海賀藤藏かいが、揚心流柔術家、揚心流柔術を家業とした、毎朝弘暁に起床し、道場に出て独修したが、その音響は開門を待つ門弟の耳を強く打ったという、又登城の途次には往来人のいないときを窺つて、四肢により城の石垣を匍匐し、梁の上からさまざまの姿勢で飛び降りるなどの修練を積んだといはれる、その長男市蔵か。秋月あきづき 肥後秋月藩。芳らあきづき 序あきづきでに。拳法けんぽう 少林寺拳法、空手。精せい 精を出す。後肥あきづき 肥後。蓋けだし 思あきづきに、なんぞ。魁偉かいい 優れて偉い人。邑むち くに、領地、むら、さと。川子道せせしひ 長州の人。嘗てかつ 以前、前に。撃げ 攻撃、撃つ。仆ふ 倒れる、倒れ伏す。少頃しょうこう 暫くして。魁そ 魁生、魁る。赤手せしや 赤子の手、素手。甲土しし 甲をつけた強い士。殺まつ 殺す。被令ひれい 命令を受ける。拊ふ 手を打つ、我が意を得たりと喜ぶ。斯言しげん 此の道の言葉。茫茫ぼぼう 広々と。神格しんかく 神と同格。維い これ、また。文王ぶんおう 周の王。茲こゝ に 此、この、茂る。祉福しふく 幸福。幸せき 幸い。錫せき 錫、熟達、賜、僧や道士の持つ杖。小心せうしん 気が小さい。翼々よくよく うやうやしい。昭上帝せうじてい 聿りつ 筆、書く。多福たふく 幸多く。文辟公ぶんへくこう 文公。祗あ 土地の神。載さい 載せる。瞽股ここ 老人の意。太古の聖天子舜の父の名。農々なむなむ 畏れ慎むさま。齊栗せいりつ 畏れ慎むさま。敬懼けいこ 瞽こ めしい、盲人。物事の道理を見分けられないこと。允いん 君主、もと、まこと、許す。舜しん 太古の聖天子。

感時花濺淚傷別鳥驚心是老杜之句也今及客後肥始覺此句之妙矣一日讀書于韞邨書屋已倦啓窓即櫻花爛然而華有鳥綿啞于花際對之之際鄉心忽生客愁交集悲不自堪悵然噫花乎非悅於眼者歟鳥乎非娛於耳者歟而今也花愈媚而余之愁愈甚鳥愈囀而余之悲愈深人心之無常也如此夫心之為物虛而靈觸物而轉隨境以嘗非自操之其存幾何然則其愁人悲人者豈獨花鳥而已哉凡物皆然初余之入木門也所見皆異鄉之人所聞皆異鄉之語如侏儻馱舌者有之牙々雜都鄙者有之語言難通生面不親對其面聞其語適足以使予生鄉心動客愁而已既而日往月來向之不通者自通向之不親者自親則對文共論開口而笑交情益厚恰似同胞於是乎對面聞語皆足以慰吾懷余於是乎益感乎人心之無常矣天草中西子執將遊江門歲之五月告別於余且請一言余曰須磨明石佳麗之地也子泊舟於此豈能不思鄉乎芳林之花富岳之雪亦景之美者也子對此豈能不思鄉乎都者大都會也奇才異能之士以至于奇技謠巧之賤無所不有也其歌也有遏雲者有能不頡耳者耶其笑也有頡城者有能不注目者耶酒極美肴尽甘鮮禹王之所未知易牙之所未嘗有能不流涎者耶子逢此數者不知能塞耳而行

掩目而過乎嗚呼是皆無益乎子之身矣礼曰飲食男女人之大欲存焉故聖賢千言万語率皆戒之子能操心如今日勤學如今日確乎不可拔則每看花聽鳥輒淚潛然下之於是乎子亦始覺杜詩之所以妙矣而後子亦得驚人句如杜矣既得如杜之句又操心如金石則非獨不負江都之花月庶幾不雖然江愧於故鄉之朋友非獨不愧於故鄉之朋友幾不愧於古之人子其最称余之与子執非一朝一夕之交故於其行也道人心之所以無常以戒之

釈文

中西子執江門に遊を送るの序

時に感じて花になみだを涙を濺涙をぎ、別れを傷んで鳥にも心を驚かす、是れ老杜（杜甫）の句なり、
今後肥に客（旅）するに及んで此の句の妙を始めて覚える、一日書を讀みここ鞞邨書屋に己に倦れ啓窓（窓）
辺にくつろぐ、既に櫻花爛然にして華に鳥に有り綿蛮（小鳥の鳴く言）、花際に対して之れ之際郷心忽ち客愁
を生じて、交も悲しみ集り自から堪えず帳で然りと窓を掩う、噫、花を悦びて眼に歟かに非らず
鳥を娛しむ眼に歟かに非らず、今花は愈よ娟くしく、余の愁い愈よ甚しく鳥愈よ囀ずりて、余の

悲しみ愈よ深く、人心無常なる今此れ心は物の虚ろを為し、靈觸物にして転た境に随い以て憂は、自から操に非ず其の幾何(どれほど)を存す、則ち其の愁い人の悲しみは豈獨り花鳥已かな、凡物(あやそのもの)は皆然り初めて余が木門(木下先生の門)に入りしところ、皆異郷の人々を見る聞く所皆異郷の語は、侏なる如く禽馱舌(意味の通じない言葉)は、之れ牙々雑(女兒の愛らしい声)有り都て鄙者の、之の語言通じ難くあり、生面(生き生きとした顔)親くせずその面に対して其を聞きその語の足に適い予れを使て郷心を生じ客愁(旅の愁れ)動き、既にして日往き月来たてこれに向つて、通ぜずは自から親まずは自から親みて則ち文に対して共に論じ口を開いて笑つて、情を交えて益々寧んじて恰も同胞に似たるは是れ、対面して語を聞き皆足を以て吾懷を慰める、余は是れ益々人心の無常を感ず、天草中西子執將に江門(江戸)に遊ばんとする、歳の五月別れを告げて余に請う余は一言余は曰うく須磨明石は佳麗の地なり、子は舟に泊すこれ豈能く郷を思わず、芳野の花富士の雪また景の美は子はこれに対して豈思郷せず江門距つは極めて遠く故に言語は通ぜず、また猶我の入肥なる豈能く思郷せず、然るに江都と雖もそれ大都会なり、自から奇才異能の士以て至り、奇技淫巧(極めて贅沢な技巧、またその物)賤く所無く

有せず、其の歌雲を盪ぎり能く有りて頽るにせずそれ笑いなり、頽る城（街のこと）は能く有り注目す
 るは、酒極めて醇美肴尽す甘鮮これ、禹王の未知の所知らずの所、易牙（料理の名人）のところ未だ嘗て
 能く涎を流さずを有す、子は此れに逢い数ば知らず能く耳を塞いで行き目を掩いて過ぎり、
 嗚呼、是れ皆益無く、子の身に礼（敬意）して曰う飲食男女人これ大なる欲に存す、故に聖賢千言に万語
 率て皆之れを戒め子能く操心（何時も気を付ける）如今（現在）日勤學び如今日確かめて抜く可らず、則ち毎
 に花を看鳥を聴きて輒ち淚潸然として下る、これ亦た子始め杜甫詩の所以（原因、訳）妙後にして子亦
 た人を驚かす句杜の如くを得る、既に杜の句の如きを得て、又た操心金石の如く、則ち獨り江都の花月
 を負わずに非らず、庶幾（希望する）愧じず故郷の朋友獨り愧ずに非らず、故郷の朋友庶幾愧ず古の人、
 子其れ最も余の子執に与えるを称す、一朝一夕の交に非らず故に其の行なり、道人の心の所以無常
 以て之れを戒しめる。

語釈

中西子執 人名。江門 江戸。遊 遊ぶ、遊学、旅。序 端書き、順序を追って申し述べる。濺 注ぐ、涙が流れ落ちる。傷心 悲しい

心、傷ましい。老杜らうと杜甫、盛唐の大詩人。句く詩の最小の単位。後肥ごひ肥後、熊本県。妙みょう幼少、美しい、しなやか、精巧、人間の能力以上の働き、計り知れない、優れた働きがある。讀書とくしょ書物を読む。于うここに、これ、発字の助字、より、から、比較、場所を示す、おいて、か、かな、文末にあつて疑問、感嘆を示す。鞞いんげん鞞、木下鞞、五竹の師事する人。書屋しょおく学舎、己すて既に。倦あ倦き、倦怠、怠い、疲れ。啓ひら啓き、啓蒙、開く。爛らん爛漫、花が闌華はな花。綿蛮めんばん鳥が鳴くさま。郷心きやうしん里心。堪た堪え、堪える。悵然ちやうぜん恨み嘆くさま、がっかりとしたさま。掩然えんぜん覆ふ覆つさま、庇ひ庇つさま。噫いあ、嘆息、驚嘆の声。悦えつ悦ぶ、喜ぶ。歎な歎、気が安らか、か、や、疑問、推測、反語、感嘆の意を表す助字。娛こ娯楽、楽しみ。愈ゆいよいよ。娟けん美しい、しなやか、姿態の美しいさま、体をくねらせる。囀せう囀る、鳥が鳴く。無常むじやう定めがない、人生の儚いさま。虚物きよぶつ虚ろな物、偽物。靈れい神、巫、精神、命、魂、靈魂。触ふれ触る、触れる。嘗かつ以前、前に。操みま操る、使いこなす、節操、貞操。幾何いくばく幾らか。愁うれ憂う。豈あどうして、疑問、反語の助字、なんと、感嘆の意を表す。花鳥かちょう花や鳥。凡物ぼんぶつ全てに物、並みの物。木門もくもん木下門下。異郷いけう異なる國、里、郷。語ご言葉。侏儻しゆたう西方の蛮人に。適かな適す。動客どうかく動く客。驚客きやうかく驚く客。開口かうくわい開口一番、言い出す。交情かうじやう友情。恰あ恰も、丁度、ぴったりと。同胞どうぼう肉親、親兄弟。対面たいめん面談、顔を会わせて。懷おぼ懐い、想い、思い。益ます益々、いよいよ。無常むじやう定めがない、人生の儚いさま。將ま將に、正に、当に。江門かうもん江戸。須磨すま兵庫県内。明石あかし兵庫県内。佳麗かいれい麗らかで美しい。歳さいその年一言一言。請こ請つ、要請、頼む。大都會だいてい大都會。奇才きさい才能。異能いのう異なる能力。奇技きぎ珍しく不思議な技。謠うた謠い、謠う、詠う、歌う。巧たくみ巧み、工、上手。賤いや賤し、賤しい。遏と遏す、止める、とどめる、遮る、抑える、断つ。頤き至る、懇ろ、長い、丈が高い。耶やや、か、疑問、反語。極ま極め、極致、極めて、とつても。美肴びじやう美味しい酒の肴。甘鮮かんせん新鮮で甘美。尽つく尽す、極める、悉く、終わる、尽きる。禹王うゑい夏の王朝を開いた聖王。易牙えいが齊の桓公に仕えた宦官、料理の名人。嘗かつ以前、前に。流涎りゅうせん涎を流す。塞ふさ塞ぎ、塞ぐ。掩おほ掩い、覆う。嗚呼あゝ感嘆詞。無益むえき得るところが無い。礼らい礼記、五經の一つ。曰い曰く、云う。飲食いんじき飲んだり食べる。男女だんじや男と女。大欲だいよく大きな欲。焉えんいづくんぞ、なんぞ、疑問、反語の意を表す、これ、ここに。聖賢せいけん聖人と賢人。千言せんげん千の言葉。万語まんご万の言語。率りつ引率、率いる、皆、戒め、戒律、戒める。能

く〓能つ、よい。操心〓心を操る、節操の心。勤學〓学問に勤勉。輒〓車のわきぎ、即ち、その度に何時も、容易く、専ら、忽ち。潜然〓涙の流れる
 さま。妙〓幼少、美しい、しなやか、精巧、人間の能力以上の働き、計り知れない、優れた働きがある。金石〓金と石。花月〓花と月、美しいもの
 代表。庶幾〓諸々の幾つかの。杜〓杜甫、閉ざす。愧る〓恥じる、慚愧。古〓昔、古代。与〓共に。子執〓中西子執。交〓交際。無常〓定めがな
 いさま、人生の儚いさま。戒〓戒律、戒める。

甲田某將遊後筑離酒已酣南子語之曰建臺以來留余年于今矣昇平之久聖君賢相之多民之浴雨露皆振古所無故余常以為物極必變自今以往昇平未可知也國之將興必有禎祥國之將亡必有殃孽我聞薩候近辭東觀一不祥也洋夷窺邊二不祥也柳米二國構怨三不祥也有聖君賢相如此民之浴雨露如此而今聞三不祥者何耶然如前二不祥者或亦塗說也後一不祥者予聞之於柳藩之人某甚詳云某曰今茲二月日米藩之民與柳藩之屠者鬪爭民斧屠者傷頭殆死屠者大怒募其徒四方其徒大集以牛皮為冑幕于野鼓且盟于衆曰傷者死乎必得抵命柳藩不禁曰屠者之事我不知也或曰先是米藩曲堤詰之則曰是必屠者所為我不知也故柳藩今云爾或曰屠者至賤故兩藩常以度外待之其看殺之如殺禽獸然故有今日事云嗚呼屠者雖賤非亦天子之民耶況戒者國之大事豈以私怨忽大事而可乎以私怨忽大事雖三尺童子亦知其不可豈兩藩而不知耶余甚惑焉且也洋夷窺邊則兩藩不可不敵王愼也不幸有事於蕭牆則其奈我后然則向之言或小吏不識事體者之言也不然必有說焉子之遊筑若與其士大夫交則亦以余言語之若有說乎歸以告予然歟否歟祥歟不祥歟猶未可知也及子之歸也將其

論焉

釈文

甲田某後筑に遊ぶを送るの序

甲田某し將に後筑(現在の北九州)に遊ばんと欲す、離酒(送別会)己に酣たけなわ南子なんし(南部五竹、本人)之れ語りて曰

う、建臺けんたい(弓は袋に刀は鞘にして戦わない)以来二百余年今まで、昇平しょうへい(平和)これ久しく聖君(優れた天子)賢相(優

れた大臣)これ多くの民は雨露うづ(恵み、恩恵)に浴し皆振古(昔から)故無き所、余は常に物極(世の中が行きすぎる)

必ず變ることとなる、これからも昇平しょうへいが続くとは思われぬ、國を興すことは必ず禎祥てんしょう(めでたい記)

で國を亡すようなことは杻變ちうへん(禍)ある、聞くところによれば薩侯さつこう近く東觀とうくわん(江戸詰め)を辞めると云うが

これ一不祥なり、洋夷よういが辺あたを窺うかがは、二不祥なり、柳川藩りゅうがわんと久留米藩くわしみの二国にこくが構怨こうえん(恨みをもって仲違い)す

るは三不祥なる、聖君賢相せいくんけんそうの雨露うづに浴して此の如き三不祥は、何んぞや然るに二藩にはんの不祥は、或は塗説とせつ

(立ち話をして聞いたことをすぐ受け売りして話す)なりか、後にこの不祥についてあらかじめを柳藩の人某し、甚だ

詳しく云つ、今茲（現在）二月 日久留米藩の民と柳藩の屠者（屠殺場の連中、相手を罵る表現）は、鬨争（騒がしく争う）に斧屠（久留米藩のこと）は頭を傷めて大怒其の徒を募りて、四方に大集して徒は牛皮を以て胃を為し（屠殺された牛が怒り出したように）、野鼓且つ盟（すぎまじく生け贄の血を嚙りあつて団結するかのよう）衆は曰つ、傷者は死しても命をかけて必ず抵抗するだろう、柳藩は止めることなく、屠者の行為の事は我の知るところではないという、先ず是れは米藩を曲堤（袋の鼠）に詰らせて屠者は必ず我が知らざるに為す、故に柳藩は云つのみ、屠者の賤しさ至るもので、故に両藩は常に度外（どがい）に侍らせて、之れを看殺しにし禽獸（鳥や獣）を殺すが如くが、今日の事であると云つ。

嗚呼、屠者は賤しと雖も亦天子の民とは云い難く、況して戒しめるは國の大事なるを以て私怨（しえん）忽ち大事とすべきである。私怨（しえん）忽ち大事なり二尺童子（判らずやを罵る表現）と雖も亦た其れを知る可きである、両藩をして知らず耶、余は甚だ惑つ且つ亦た、洋夷は辺を窺（あたり）いている時に両藩敵対している場合ではない。嘆くばかりである、事有りて幸とはならない。

蕭槽（内から起る心配事）の愁いである、それはどうしようも無いが此の言に向つて、或は小吏は識るま

い事は之の言なり、そつだとせず必す説を有する、子の遊筑若し士大夫（高官の役人）と交わり余の言語を説す若く有る、歸りて予め告げ然るにや不か祥か不祥か未だ知る可きもないが、子が歸るを待つて共に事について論ぜんとしよ。

語釈

贈る＝贈呈。甲田某＝甲田威郷。後筑＝筑後、福岡県。序＝はしがき、順序を追って申し述べる、次第。酣＝闌、盛り。南子＝南部五竹。建業＝弓は袋に刀を鞘にしまい使わないこと。韶余年＝二百年余り。昇平＝世の中が穏やかに治まっていること、衰乱時代から抜け出て、太平に至るまでの上り坂の平和時代、太平。久＝久しい、長い。雨露＝雨と露。禎祥＝めでたく幸い。秧稊＝背の低い稲の苗とひこばえ、稲の切り株から新しく出た芽。薩侯＝薩摩侯。東觀＝参勤交代。辞す＝断る。洋夷＝静養の夷狄。辺＝我が国の周辺。窺つ＝覗き見する。柳米＝柳川藩と久留米藩。怨＝怨む。構え＝身構えする、用意する、抵抗する。聖君＝聖人、君主。賢相＝賢人、大臣。一不祥＝一つ幸せてない。塗説＝立ち話して、聞いたことをすぐ受け売りして話す。茲に＝此处に。与＝共に。鬪争＝騒ぎ争う、騒々しい喧嘩。斧、斧、斤、傷＝怪我、傷、負傷。殆ど＝大方、全て。大部分。怒り＝怒る。募せ＝増す。青冪＝甲冑。野鼓＝野太鼓。盟す＝盟約、同盟。于＝ここに、これ、発字の女児、と、接続、より、から、比較、場所、を示す、おいて、か、かな、文末の疑問、感嘆を表す。衆＝大衆、皆。抵れ＝抵触。米藩＝久留米藩。柳藩＝柳川藩。曲堤＝郭の堤。爾＝なんじ、その、この、然り、しかるに、のみ、ちかい。曰く＝云う。屠者＝殺す者、家畜の屠殺を業とする者。度外＝考えの外、問題にしない。侍し＝侍る。看殺＝見殺し。禽獸＝鳥や獸。嗚呼＝感嘆詞。雖＝けれども。賤＝卑賤、賤しい。天子＝天皇。況＝いわんや、まして。戒る＝戒律、戒める。私怨＝私的な怨み。忽ち＝忽然。童子＝童、子供。耶＝や、か、疑問、反語。惑う＝惑う、迷う。両藩＝柳川藩と久留米藩。王愾＝盛んな気概。有事＝旦緩急、

何事か起きた時に、しよつしよつ蕭牆しよつしよつ門の内側、身内の、家庭内の。奈ないかん、いかんせん、いかんぞ、どうにもしょうがない。后こひいて、後しよつ小吏しよつ小役
人、下級官吏。識しらずし知らない。体てい体裁、ふり。遊筑しゆちく筑後に遊ぶ。士し学徳のある人、男子の美称。大夫たいふ周代、天子、諸侯に仕えた官吏の身分
の一つ。歟よ気が安らか、か、や、疑問、推測、反語、感嘆の意を表す助字。猶なほ尚、直えん焉えんいずくんぞ、なんぞ。

吾友苓州岳吉甫愛業於後肥木先生丰姿秀麗長身而清癯鶴也余之游後肥也一見異其骨相以為必才子也吉甫一日持文稿來示余乞正文章流暢井々有法立論亦出人意表殆如老成人詩則似李長吉奇句往往驚人問其年即曰十有七年矣余曰果然他日樹赤幟於一方者必此人也吉甫亦以為知己者每文章若有疑義輒以以質于余々亦以為畏友云歲六月余將游温岳時吉甫將省親乞從焉於是相携登温岳時吉甫將南子歌於前竹子和於後歌聲震谷白雲為遏天風吹衣飄々乎欲仙甚快矣既而入苓州至富岡与吉甫分手至崎陽遍探西肥名山過後豐至日薩隅囊空衣弊蕭然而還再問韉邨書屋則吉甫先生焉相視各賀無恙乃謂吉甫曰与君携手登温岳也流汗如滴葛衣尚熱恍乎如昨而今則雨雪霏々歲云暮矣名山常在會心之友難常得此游豈可復余也衣弊矣游亦倦矣將歸也吉甫曰僕亦彈劔已久矣請以一言為贈余曰平生見人不為少如子不易得之才哉平生交人也多莫逆如子亦少矣是別也不可不以贖傷哉貧也囊已空矣無以贖雖然余也貧於財耳於道則富矣請嘗為子述之余少也孤家貧而不自給平生好讀書久而頗有得乎道矣然才拙命薄欲立己仆欲行先躡乃以謂宿志不成命也如

何如其道則不可易也於是乎游鎮西欲探名山觀民風以為一家書嗟乎窮人無適而不窮游西肥則遭疾疫入東肥則中風寒至薩日隅前後豐則逢米價騰躍囊中為之空噫天之餒吾体膚空乏吾身一何至於此耶雖然余之窮乏既非一日而溝壑自分仆而復起百敗不撓以至於今日者唯有富貴不能謠貧賤不能移威武不能屈者在焉可以語君不可以贈君也君歸而求之自得之矣求之有道養之有法勿如宋人然求之以漸養之以緩日求月養游焉息焉勿有間斷庶幾乎得之夫人世知糾繩焉知富之不為貧賤之不為貴若素富貴而弗謠者有乎否素貧賤而弗移者有乎否逢威武而弗屈者有乎否若弗謠於富貴弗移於貧賤屈於威武則己有得焉君果有得焉乎則幸來問吾於錦水之浜示吾以其所得夫錦水之流清瑩可鑿水上之山秀麗可掬雖不及温岳亦得復奇矣沿流隨柳詠而歸不亦一快事乎行矣吾將刮目待之也

釈文

たけきちほ うれいしゅう
岳吉甫 苓州に歸るを送るの序

たけきちほ うれいしゅう
吾が友 苓州（天草、今の苓北町） 岳吉甫 業を愛し 後肥に於て 木先生 丰姿 秀麗 長身にして 清輝 鶴如なりと、

余の後肥こいひに遊ぶあそぶとき、一見異なる其の骨相こつそうは必ず才子さいし為すと、吉甫きちほ一日文稿ぶんこうを持して来たりて示し余に正しく文章ぶんしょうの流暢りゅうちやうを乞こつ。

物事の筋道を立て乱れることなく法を得て論を立て亦た出入の意表も殆ど老成人らうせいじんの詩の如し、以て中唐の詩人李長吉りちやうきち（李賀）は鬼才といわれ象徴的幻想的の詩が多く奇句きく往々おうおうにして人を驚かし、問えば十七歳という、余は曰う果して然り、他日樹たじつに赤い幟はたなるは必ず此の人なりと、吉甫亦た以て余の心や胸の中を良く知って呉れる人なり、毎に文章ぶんしょうを成し疑義ぎぎあるが若くその度に、質ただして余の敬服すべき友とを以て為云つ。

歳の六月温岳おんたけに遊びしとき吉甫きちほは、他郷たじやうに出ている者が故郷に帰り、父母を見舞うが如く従したがうを乞い、相携あいたずまえて温岳おんたけに登る、南子歌なんしう、前竹子まへしこれに和わし後に歌声谷かきやうたにに震ひびき、白雲はくうん遏とどめるを為す天風は衣いを吹いて飄々ひゅうと、仙人せんじんのようであつた甚だ快なり、既にして苓州れいしゅうに入り富岡とみおかに至り、吉甫きちほと手を分けて崎陽さきやうに至り、遍あまく西肥せいひの名山めいざんを探し前後ぜんご豊ゆたかを過かり、日薩隅にっさつぐもに至り囊空ふたごらみしく、衣は弊せれ蕭然せうぜん（物寂しく）として還また再び鞞いそん郵書屋しよおくを問とい、吉甫きちほと先生せんせい相視あひみて恙やが無なきをを賀がしてくれ、吉甫きちほに謂いつ、

君と手を携えて温岳に登り、流れる汗は葛衣に滴るが如く尚お熱さは恍昨（うっとり昨日）の如くにして、今は雨雪甚だしく霏々と降る、歳の暮名山常に會心在りこの友は常には得ることは難かしい、余も復た弊しく再びこのように遊びは出来るものではない、吉甫は曰う僕は亦た弾劒已に久しく、一言の贈りを請うと、余は曰う、平生人を見るを為さず少に子の如くに易きは可からずしてこの才を得たる、平生は人に交り多くする莫れ、逆に子の如く亦た少に是れ別れて可からず、以て贖義（饑に送る）かな。貧しく囊己に空しく、以て贖け無く然ると雖も、余は亦た貧しく賤しくも道に於て富を請い嘗て妻子を為し是れ予め少なる、孤り家は貧しくして自給せず、平生讀書を好み久しく、頻る得るを有し道は、然れども才拙にして命薄く立ちて、己に仆れんとしている、行先蹟くを以て謂う、宿志成らず命また、如何（どうだろう）に其の如き道則ち易き可からず、是れ於て鎮西に遊び、名山を探し民風を以て一家書を為している。

嗟、窮人（生活の苦しい人）適する無くして窮せず、西肥に遊びて疾疫（悪性の流行病）に遭い、東肥に入り中に風寒く薩日隅前後豊に至りて、米価騰躍に逢い囊中は空しきを為し、噫、天は吾に餒り皮膚は空

しく、乏しく吾が身は一つに何んぞや、ここに至るは然りと雖も余の窮乏既に一日にして非らず、
 溝壑（谷間）自から分り仆れて、復た起き百敗不撓以て今日に至る、唯だ富貴能はず貧賤を潤すも能
 はず、威武を移して屈するも能はず可し有り、以て君の語を可しとせず以て君に贈るなり、君歸りて
 之れを求めこれを自得之を、求めるを有す道之れを養う法有るをせず、宋人の如く然るべく之れを求
 め以て漸らく養い以て緩月日を求めて游息して養い、間断せず庶幾うを有す、之れを得て夫れ人世の
 糾纏（纏わり）を知り、富の為さず知り貧賤を為さず責きは若い富貴を潤さず、有否は素より貧賤に移
 らず有否は威武に逢い屈せず有否は潤さず若いて富貴に移らず貧賤に屈せず威武則ち己に得るを有
 す、君果して得るをす、幸来たりて吾が錦水の浜に問い吾に示して錦水の流れ清瑩に鑑がみて水上の
 山秀麗を掬む可し及ばずと雖も温岳亦た復た奇を得る、流に沿うて柳に随いて詠じて歸るも亦た一
 快事行つよう、吾れ將に刮目（眼を擦って良く見る）して之れを待つなり。

語釈

岳吉甫 人名。 岑州 天章。 序 はしがき。 順序を追って申し述べる。 吾友 自分の友達。 業 学業。 木先生 木下鞞。 丰姿 顔かた

ちが豊かなさま。秀麗しゅうれい＝秀でて麗しい。長身ちやうしん＝背が高い。清癯せいよく＝痩せていて清々しい姿。鶴つる＝鶴のよつな。遊ぶあそぶ＝遊ぶ、遊学、旅。後肥こうひ＝後、熊本。骨相こつそう＝顔の骨格。才子さいし＝才能のある人。文稿ぶんこう＝文の下書き、草稿。乞こ＝要請、頼む。流暢りゅうちやう＝言語、文章等のすらすらと淀み無いこと。なだらか。井々せいせい＝物事に筋道が立っていて乱れないさま。法立論ほつりつろん＝人の手本として守るべきもの。老成らうせい＝出来上がる。李長吉りちやうきつ＝李賀、中唐の詩人。唐室たうしつの一族。奇句ききう＝珍しく、不思議な句。往々おうおう＝常々、屢々、時々、まま、時として。曰いく＝云う。赤幟せきしやく＝赤い幟。樹た＝立てる、建てる。他日たいつ＝後日、又の日。一方いっほう＝一方、一角。吉甫きふ＝人名。知己ちき＝知人、古くからの知人。毎まい＝毎々、その度に。文章ぶんちやう＝文、礼楽や制度など國の文化を形成しているもの、文字を連ねて一つの纏まった意味を述べたもの。疑義ぎぎ＝疑わしくて決定できない意味、疑問点。鞞ちやう＝車の脇木、即ち、その度、何時も、容易く、専ら、忍ち。質しつ＝質問する。于う＝ここに、これ、発字の助字、より、から、比較、場所を示す、おいて、か、かな、文末にあつてぎもん、感嘆を示す。畏友いゆう＝敬服すべき友人。焉えん＝伊豆君ぞなんぞ疑問、反語の意を表す。相携あひたえ＝互いに手を取り。南子なんし＝南部五竹。竹ちく＝笛。子し＝吉甫。和わし＝合わせる。震ちんせ＝振るわせ、震わせ。白雲はくふん＝白い雲。遏あつし＝止める、留める、遮る、抑える、断つ。衣い＝衣服。飄々ひょうひょう＝風に吹かれ翻るように。富岡ふたかみ＝天章。与よ＝共に。崎陽きやう＝長崎の中国風の呼び方。遍あまく＝普遍、隅から隅まで。西肥せいひ＝西肥後。名山めいざん＝有名な山。過あやり＝立ち寄る、訪れる、去る。後豊こうほう＝豊後。日薩につさつ＝日向、薩摩、大隅。囊のう＝財布、懐中。空くう＝空。衣弊いはい＝衣服も疲弊して。蕭然せうぜん＝物寂しいさま。還かへり＝帰り。問とう＝訪問。鞞ちやう＝木下鞞。書屋しよゐ＝学舎。先生せんせい＝木下鞞。相視あひみる＝互に見合ふ。恙しやう無し＝無事である。賀がす＝祝賀、喜ぶ。乃たい汝に、即ち、そこで。謂いう＝云う、述べる。葛衣かゐ＝葛糸で織つた帷子。葛布かふ。温岳おんだく＝雲仙。恍乎ちやう＝うっとりとする、気抜ける、臆おそ気な。霏ひ々＝雨や雪が甚だしく降るさま、雲の飛ぶさま。歳さいの暮くれ、歳暮さいぼ、年末。名山めいざん＝有名な山。會心かいしん＝心に通う。豈あ＝どうして、疑問、反語の助字、なんと。遊あそぶ、旅、訪れる。倦けん＝倦怠、疲れる。弾劾だんかく＝劍の素振り。已やに＝既に。請こい＝要請、頼む。平生へいせい＝普段、常々。才さい＝才能。傷いたむ＝悲しむ、傷む。贖しん＝贈り物、餞、餞別、贈る。雖いふれども、たとい。讀書だんしよ＝書物を読む。嘗かつて＝以前、前に。頻しんに＝頻繁に。才拙さいじやく＝才能が拙劣、自分を卑下して云う。命薄めいはく＝薄幸、運命に恵まれない、薄命。仆たおれ＝倒れる、死ぬ。行先ぎやうせん＝行く所。躓つまずき＝躓く、倒れる、失敗する、しくじる。乃たいすなわち、そこで。謂いう＝云う、述べる。自給じきふ＝自活、人に頼らず生きる。宿志しゆくし＝前からの志、

宿望、夙に。命めい運命、天命。如何いかに如何、どうか。鎮西ちんせい九州。一家いっかの書しよ一角の人の書。嗟さああ。窮きゆう窮まる。適かな適う。適合。西肥せいひ西肥後。疾疫しつえき
 流行病、悪性の流行病、疾病や疫病。遭あ遭う。遭遇、確る。東肥とうひ東肥後。寒風かんとウ寒い風。薩日隅さつにひぐし薩摩、日向、大隅。前後ぜんご豊ひん豊前と豊後。米価べいけ米
 の価格。騰とう高騰、高くなる。逢あ逢う。遭遇、逢う。囊中のうちゆう財布の中、懐中。躍おど躍り。躍る、空だから。空くう空、一銭もない。噫いああ。餓がい飢える、腐
 る。体膚たいひ体や皮膚。耶やや、か、疑問、反語。雖いふたせけれども、たとい。窮乏きゆうぱふ乏しく窮まる。溝壑こうかく深い谷。深い空堀、溝。仆たおれ倒れる、倒れ
 伏す、死ぬ。百敗ひゃくばい百の失敗。撓たひまます。負けずに、弛ゆるまらず。富貴ふき富と貴人。能あたはず。出来ない。謡うたう。歌う、詠う。謡う。貧賤ひんけん貧しく賤しい。威武いび
 権威と武力、非常に勇ましい力。宋人そうじん宋の人。漸ようぜんく。漸次。緩ゆる緩慢、緩やかに。游あそぶ。訪れる、旅。間断かんだん絶える間なく。庶幾しよいく諸々幾つか。
 弗ふつ払う、去る、あらず、ず。糾縄きうじゆう罪を糺して縄を掛ける。貴賤きせん身分の高いと低いと、貴いと賤しい。若素じやくそ元々の素質。素そ素質。錦水きんすい錦川、
 錦帯橋の架かっている川。清瑩せいえい清らかな美しい石の名、玉の美しい色。鑿ざく泉を鑿る。水上みずかみ上流、水の上。秀麗しゆれい秀でて麗らか。掬くむ。推量、掬
 う。奇き珍しく不思議。妙よ詠み。詠む、詠う。快事がいじ愉快な事。刮目かつもく目を凝らす、目を擦って良く見る。

35 送衛藤厚夫歸日州序

霧州之山自遠而望形如烏帽突天而立蒼氣鬱勃戊午秋余自後肥經佐土原至飢肥道過霧州之下植筇望之喟然而歎曰異哉山也是非帝王之起焉者耶磅礴之氣猶如未漠然其所鬱積或出磊落魁偉之人焉耶遂至飢肥還又歷佐土原過高鍋至延岡求耶謂磊落魁偉之人無得焉因又異名精靈鬱勃如此而不逢一異人何人也余足跡未遍而未逢其人邪既而又入後肥先是識日州衛藤厚夫于鞆邨書屋歲四月相携登蘇岳自是交情愈密某聞余還則來告曰遲子世久矣僕之歸將在近幸賜一言贈余乃語以前所異且謂曰蓋有乃矣吾未之見也子若知之幸以告吾厚夫曰詩云維岳降神生甫及申名岳之降神自古有之雖然申甫之後復有幾人以僕觀之彼人也我也何借於岳神之手哉書曰維聖罔思為狂維狂思為哲僕也雖狂將思之世人則曰某也自岳降天也烏為可及某也為列星命也烏可企遂自奔而不自脩是以其狂愈狂而其愚益愚宜乎子之不逢一異人也余曰有是哉有是哉名山之氣果不漠然也孟子曰人皆可以為堯舜微子言人或不信焉行矣厚夫勿令人謂霧岳無靈曰州無人也

釈文

衛藤厚夫日州に帰るを送るの序

霧州の山遠くより形を望む、恰も隱者がかぶる頭巾の烏帽が、天を突くかの如くして、蒼氣鬱勃(草
きりしま えんりつりあひあひ じゅうしゅう じゅうしゅう くるを くるの じゆ
霧州の山遠くより形を望む、恰も隱者がかぶる頭巾の烏帽が、天を突くかの如くして、蒼氣鬱勃(草
木がこんもりと茂るさま)として立っている。戊午の秋余は後肥より佐土原を経て、飫肥道に至り霧州の下を
過りに箆を植てて之を望む、喟然(嘆息するさま)歎きて曰う異しき山かな、是れ帝王(天の神)の起るに
非らず、磅礴(満ち塞がるさま)の氣猶お未だ漠然として、其所鬱積(籠もり塞がるさま)或は磊落(小事に拘らない
さま)として偉丈夫(体が優れて立派な男)に魁て、遂に飫肥に至り還た、又佐土原を歴て高鍋を過りて延岡
に至り、暇を求めて磊落魁偉を謂い得る無く又異名山精靈鬱勃此の如くして、一異人何人にも逢は
ずして、余は足跡未だ遍ずして、又後肥に入り先ず識る、日州の衛藤厚夫ここ軒邨書屋歳四月相携
えて蘇岳に登る、是れより交情は愈よ密となる某し余に聞き、還たまみえ来りて告げて曰う、子
は世に遅れること久しく、僕の帰り將に近くに在り一言贈るを賜るを幸とする、余は語を贈る以前異
き且つ謂う、これ有するを曰う吾れ未だ之れを見ず、子若し之れを知るならば幸いとす、以て厚夫

吾に告げて詩に曰う、岳を維ぎて降り神は生れしめに及び、申して名岳に降し古より之れ有すると
 雖も、然るに申して甫めし後に復た幾人か有り、以て僕は之れを觀て彼の人また我は人なり、何んぞ
 岳を借りての神の手かな書いて曰う、維聖（聖の始まり）罔思（道理にないことをこじつける）狂維を為す、狂思哲
 を為すは僕なり、狂と雖も將にこの思い世人則ち曰う某しになり、岳より降天は烏か某しに及ぶ
 なり、列星命を為す烏なる可し、企だてて遂に自棄自脩せず是れ以て、其の狂い愈よ狂にして其の
 愚は益々愚宜く、子の逢はず一異人なり、余は是れ有るかと言ふ、是れ有るかな、名山の氣果して漠然
 （黙っている）とせず、孟子曰く人皆以て為す可し、中国古代の聖天子と謂われた堯帝と徳のある天子の
 代表といわれた舜帝と殷の忠臣微子は曰く言ふ人は或は信ぜずを行ふ、厚夫人に令ると勿れ、霧岳
 靈は無く日州無人かな。

語釈

衛藤厚夫 人名。日州 日向。序 はしがき、順序を追って申し述べる。霧州 霧島。形 形、型。烏帽 烏帽子。蒼氣 青々と
 した気。戊午 安政五年、一八五八。後肥 肥後。自 自から、より。佐土原 宮崎県佐土原町。飢肥道 飢肥街道。過り 通過。節 杖にする竹、杖。
 植て 立て。喟然 嘆息するさま。帝王 天子。焉 なんぞ、これ、ここに。耶 や、か、疑問、反語。磅磅 広大で限りのないさま、満ちぶさがるさ

ま。漠然ぼくぜん静かなさま、廣くとりとめのないさま、明らかでないさま、ぼんやりと。鬱積うつせき籠もり塞がる。飢肥おび日向宮崎県。還るかえ帰る。歴ずれき歴訪れきぼう過りよ旅、訪れる、通過。高鍋たかぬべ日向、宮崎県。延岡のびのき日向、宮崎県。猶なほ直、尚。耶やや、かの疑問。磊落らいらく心が大きく小事に拘らないさま。魁偉かいい体が大きくて立派。因ちなみに理由、由来。訳、異名いみな異なる名、あだ名。精霊せいれい魂、神、物の怪、死者の魂、不思議な気、宇宙万物の根元。鬱勃うつぱく生氣や意気の盛んなさま、草木のこんもりと茂るさま。異人いじん普通より違う人、外国人。足跡あしあと足跡、歩いた跡。謂いつ云いつ、述べる。遍あまねく隅から隅まで。邪じや邪な。鞞いん木下鞞。書屋しよや学舎。歳さいその年。蘇岳そたけ阿蘇山。交情かうじやう友情、交際。愈ゆ益々。密みつ親密。子し衛藤厚夫。遅おそし遅い。久しひさ久しい。相携あいたまえ互いに手を取り。乃だいそこで、なんじ、それがし、そこで、上を受けて下文を起す助字、なんぞ、語調を整える助字。以前いぜんこの前、前から。蓋けだじ思つに、不確かなことを推定する助字、これ、助字解説なんぞ、反語の助字。維岳こゝろこの山。維これ維い、これ、また、ただ、綱、紐、繫ひぐ。甫ふ始め、始めて、大きい、父、野菜畑。申名岳まのたけ山名。降神くだりかみ神が降りる。雖いひなほ唯、助字解説、確定の助字、けれども、仮定の助字、たとい、としても、これ、発語の助字。申まをもつす、のびる、かさねる、神。申まを岳神がくしん山の神。曰いわく云いつ、申まをす。維聖いせい此の聖。罔思ぼうし物を知らない。罔ぼう網、物を知らない、罪人を捕らえる法律、人を束縛する、道理に暗い。岳やま山、山岳さんかく哲僕てつぼく明らか、賢人、物事も道理に明るい人、見識が高く道理を極めた人。命めい運命。自奔じほん自ら奔走。脩しゆらすしゆ修まらない。愚ぐ愚か。益えき益々。宜い宜い。漠然ぼくぜん静かなさま、黙もくつているさま、廣くとちとめのないさま、明らかでないさま、ぼんやり。孟子もうし戦国時代の鄒省鄒県地方の人、王道、仁義を説いた亜聖といわれる。堯舜やうしゆん中国古代の聖天子である堯帝と舜帝。微子びし殷の忠臣、紂王の庶兄で屢々紂王を諫めたが聞き入れられず、國を去つた、のちに周の武王に殷の後裔として宋に封じられた。焉えんいずくんぞ、なんぞ、疑問、反語の意を表す、これ、ここに、これより、これに、句末に用いる助字、か、や、疑問、反語の意を表す。霧岳きりやま霧島

山「日州」日向、宮崎県。

苓之為州在西南海洋中真耶謂彈丸黑痣之地而其居民率皆蜃戶鱗丁農人樵父之類耳其在蜃戶鱗丁農人樵父之間卓然讀書學道有過人識者吾甲田威鄉耶余之謁木先生也與威鄉相得懽甚威鄉為木門高足為溫厚長于史學與之語古今成敗滾々如流語及洋夷事扼腕切齒為發大息大不類其平生蓋其中有確乎不可拔者而然矣歲之五月告予曰吾歸將有日乞一言贈余乃告之曰人之所貴在德不在地文王西夷人也殷紂中華人也德如文王夷而謂之華可惡如殷紂華而謂之夷可今中國之人奢靡輕薄殉世遂時人歌亦歌人舞亦舞脅肩哨口拳動皆視于人何與傀儡異哉近歲洋夷窺邊拳世大怖二三學火技者相率稱曰海防要器莫過西洋大砲焉於是劔客売劔而鑄砲射者鬻弓以換硝劔客射者猶可自稱儒流者被異服學蘭語成隊結伍以放巨礮大磧其声日震山岳亡何忽然絕響嗚乎是可謂無特操者矣豈得不謂之夷矣耶夫中國之廣土民之多索一人不殉世如威鄉者聿亦不可得也亦宜矣可勝歎哉夫為大丈夫者當烈風迅雷不迷幽囚困阨不變臨大事遭離亂坦然不動心曹孟德在戎馬之間橫槊而賦詩諸葛亮葛巾羽扇于矢石之際未嘗戎服視百萬貔貅不異木偶人自非坦然不動心焉能如

此哉今蚩不能及二者而有少知大義不殉世者戮力一志以輔翼王室則假使洋夷拳國以來亦無所患獨恨世人畏犬如虎徒使夜郎王自大也頃者洋夷復來諸互市昔即在門今則入堂其勢已迫矣是實危急存亡之秋也吾曹不可不感激自奮勵節磨行以敵王愾也醴泉芝草不擇地而生安知苓州僻陋一小島不生卓偉奇傑之士以振勵天下之士氣耶威鄉聞斯言也蓋義形於色慨然而謂曰乞書且夕誦之以自勵遂書為贈

釈文

甲田威郷天草に歸るを送る

苓れいこれ州しゅうを為して西南海洋の真中に在り、謂う弾丸黒痣だんがんこくし（黒痣くろし）の地にして、其の居民率きよみんひきいて皆蟄戸たんこ（海
上生活者や漁業）齧丁さちよう（塩作り）農人樵父のうじんしやうふの類にして、其の蟄戸たんこを嘗み齧丁農人に樵父しやうふの間に、卓然たくぜん（高く優れて
いる）と書を読み道を學び過すは、人の識しるところなるは吾が甲田威郷こうたいききやうなり、余の謁まみえるは木先生もくせんせいと、
威郷いききやうを相い權けんびを得る、威郷いききやうは甚しだしく木門もくもんの高足こうそく（一番弟子）を為す、

人は温厚おんこうを為して史学しがくに長たけて、古今ここんの成敗せいばいを語れば滾々こんこんと流るが如く、洋夷やういの事に及およんでは扼腕やくわん切齒せつし

(残念がったり喜ぶときは左手で右腕を強く握りしめる) 大息を発すること大にして、其れ平生に類せず其の中に有りて
確乎(しつかりとしたさま) 抜くは可らずと、然り歳の五月予に告げて曰う、吾が帰り將に日は有らず一言賜
りを乞つと。

余これに告げて曰う、人の責き所は徳に在りて地に在らず「文王」は西夷の人なり、周の武王に滅ぼ
された殷紂は中華人なり、徳は文王は夷の如しと云うに、是れ晋(文王の時代の名) 悪しく殷紂の萃あ
つまるが如しと謂うは、之れ夷は今に可し中華の人は奢靡(贅沢ではない) 軽薄(真心がない) にして、世を殉
時をい人は歌い亦た歌は人を舞い、脅肩(わざと敬い謹しむ態度) 亦た舞い口を哨め挙げて勤め皆視る、人
は何んと傀儡(人の思うままに操られる) かな、近歳洋夷辺を窺い世を挙げて大に怖れている、二三火技を
學び相率いて称して曰う、海防の要は西洋の大砲に過ぎる莫れ、是れ於て劔客は劔を売り、鑄砲射者
は弓を鬻に換え、硝(火薬) 劔客者は、自から称える可し儒流者は異服を被て蘭語を學ぶ隊を成し、
伍を結び巨礮大磧を放つて其の聲は日に山を震はせて、岳を亡さんと何んたる忽然絶響なる、嗚乎、
是れう可し特に操者無く豈謂わざるは、之れ夷夫れ中華の之れ廣土の民の多きの一人索て世に殉る

は、威郷いききょうの如くのへ聳る亦た得るを可からず、亦た宜しく勝れるを歎かず、夫れ大丈夫だいじょうぶを為す、烈風迅雷れつぷうじんらい
 に当り迷はず、幽しゆうに因よつて困阨こんあく（苦惱）変らず大事に遭あつて離、乱に臨み、坦然たんぜん（平らかなさま）不動心で、
 三国の魏ぎの武帝曹孟徳は戎馬じゆうば（軍馬）の子が国境で生まれ紛争が絶えず長い間国境で駐留していえず間
 に、渠ほを横にして詩を賦す、諸葛亮は葛巾かつじん（葛で作った頭巾）羽扇うせんで、矢石やせき（戦争）の際未だ嘗て戎服百を視
 て万貔貅ひきゆう（猛獣の名で勇猛な軍隊のこと）と木偶もくぐ（木偶、木で作った人形）に異らずと自から坦然に非らずとも、不動心
 能く此の如し、今能はずと雖も二者に及び、少なくとも大義不殉たいぎふじゆんを知るを有す、戮力りくりよく（力を合わせて協力
 志を二つにする）以て王室を輔翼ほよく（助け護る）仮にも洋夷やういをして拳國けんこく以来り亦た患い、獨り世人を恨むところは
 無し、犬を畏れる虎の徒に、夜郎自大やろうじだい（つまらぬ人が世間知らずを庇っている）王わうを使って自大じだいなり、頃者けいしや（近頃）洋夷やうい
 復た来たりて互市ま（開港して貿易）を乞う昔即ち門に在り、今則ち堂に入り其の勢い己に迫まる、是れ實に
 危急存亡の秋、吾曹がそう（ともがら）感ぜざるは可からず自から激しく奮励節磨行ない以て敵王愾てきおうがい（諸侯が王の
 恨み怒る相手に立ち向かうの意で相手に對抗して打ち勝とうとする意気こみ敵愾心）なり、醴泉れいせん（甘味のある水）芝草しやく（薬草）の地を擇えらば
 ず、安んじて苕州僻陋れいしゆうへくろう（狭い辺鄙な所）の一小島を仮りて生きるを知り卓偉奇傑の士は生ぜず以て萬天下まんでんか

に土氣を振り威郷斯の言を、蓋義(義を覆い包み)形色(顔色)慨然(憤り嘆くさま)するを謂つて曰つ、書を乞い
旦夕(朝晩)に誦えて自からを励し書を遂してに贈るを為す。

語釈

甲田威郷(こうたけいこう)人名。天草(あまくさ)熊本県(くまもと)苓(れい)みみなぐさ、みみな、葎耳科(けんじか)の二年生草本、夏に白い花が咲く、苦菜(くさい)かんぞう、豆科(まめ)の多年草本、
菓草として用いる。州(しゅう)國(こく)瀋(しん)苓州(れいしゅう)天草(あまくさ)西南(せいなん)肥後の西南(あまのせいのせいなん)海洋(かいよう)真中(まなか)真ん中(まんちゆう)謂(い)つ云(い)う述(しよ)べる。耶(や)や、かの疑問(ぎもん)彈丸(だんがん)銃砲(じゆうぱう)の玉、
彈丸(だんがん)黒痣(こくし)黒い痣(こくし)黒子(こくし)居民(きんみん)住民(ぢうみん)皆從(かいじゆう)つ。蟪(かい)中国福建省(ちゆうごくふくけんしん)に住む異民族(いみんじく)水上(すいじょう)で生活(せいかう)して漁業(りくぎやう)をする。蟪戸(たいこ)海人(かいじん)あま、漁師(りくぎし)鱗丁(りんてい)塩(しん)を造(つく)る人(ひと)農人(のうじん)百姓(ひやくしやう)樵父(しやうふ)樵(しやう)山(やま)で炭焼(たんやう)きなどをして暮(く)らす人(ひと)類(るい)仲間(ちゆうかん)耳(じ)みみ、きく、みみにする、のみ、だけ、ばかり、句末(くご)にそえて
限定(げんてい)のいを表(あらわ)す助字(すけじ)、玄孫(げんそ)の曾孫(そうそ)また玄孫(げんそ)の子(こ)、本人(ほんじん)より八代目(はちだいめ)の孫(そ)先祖(せんぞ)のことを耳(みみ)で聞(き)くだけの意(い)、仍孫(じゆうそ)ともいう。卓然(たつぜん)高く拔(は)きんでているさま、高く優(ま)れているさま。讀書(どくしよ)書物(しよぶつ)を讀(よ)む。學道(がくどう)學問(がくもん)の道(みち)過(よ)る訪(ま)ねる旅(りよ)行く耶(や)や、か、疑問(ぎもん)反語(はんご)感嘆(かんとく)の意(い)を表(あらわ)す助字(すけじ)、俗(じやく)に父(ちち)を呼(よ)ぶ言葉(ことば)耶(や)爺(や)謁(えつ)す逢(あ)う合(あ)う見(み)る木先生(もくせんせい)木下(きのした)鞞(びやく)威郷(いこう)甲田威郷(こうたけいこう)權甚(かむじん)甚(た)だ喜(よろこ)び樂(たの)しむ。木門(もくもん)木下門下(きのしたもんげ)高足(たうそく)高弟(たうてい)高(たか)い弟子(でし)温厚(おんこう)優(ま)しく情(なさけ)が厚(あつ)い、暖(ぬく)かで穩(ま)やか。長(なが)じ勝(か)る優(ま)れる。于(こゝ)こゝに、これ、発字(はつじ)の助字(すけじ)文首(ぶんしゆ)文中(ぶんちゆう)に用(もち)いる助字(すけじ)、に、補語(ほご)場所(ばしよ)を示(し)す、を、補語(ほご)を示(し)す、と、接統(せつてい)を示(し)す、より、から、比較(ひかく)場所(ばしよ)を示(し)す、おいて、か、かな、文末(ぶんまつ)にあつて疑問(ぎもん)感嘆(かんとく)を表(あらわ)す。史字(しじ)記録(きらく)歴史(れきし)歴史(れきし)の書(しよ)の學問(がくもん)与(と)共(とも)に。古今(ここん)昔(むかし)と今(いま)今(いま)古(ふる)昔(むかし)から今(いま)まで。語(ご)言葉(ことば)語源(ごげん)成敗(せいばい)事(こと)が成(な)ると、敗(ま)れると、成功(せいこう)と失敗(しぱい)勝(か)つと負(ま)ける、処罰(じよばつ)裁判(さいぱん)歳(さい)々(ざ)泉(いづみ)から水(みづ)が湧(わ)き出(で)るさま、またその音(ね)識(し)知る。洋夷(やうい)西洋(せいやう)の夷狄(いぢ)扼腕(おつせき)扼腕(おつせき)切齒(せつし)切齒(せつし)扼腕(おつせき)齒(し)を食(く)ひしはり腕(うで)を握(にぎ)りしめる、激(げき)しく怒(こ)るさま「大息(たいそく)大きなため息(ためいき)平生(へいせい)普段(ふだん)常々(じょうじょう)蓋(けだ)思(おも)つに、不確定(ふてきてい)な事(こと)を推定(すいてい)する助字(すけじ)、これ、助字(すけじ)解説(かいせつ)なんぞ、反語(はんご)の助字(すけじ)確平(かくへい)確(た)かに、確定(かくてい)歳(さい)々(ざ)その年(ねん)乞(こ)つ要請(ようけい)頼(たの)む。乃(ない)なんぞ、それがし、すなわち、そこで、上(うへ)を受けて下文(げんぶん)を起(おこ)す助字(すけじ)、なんぞ、語調(ごてう)を整(ととの)える助字(すけじ)文王(ぶんわう)古代(こくだい)の聖王(せいわう)中華人(ちゆうわじん)

「使い、使いの徒。夜郎王やろうおう」つまりぬ人間が世間知らずでいばる、漢代に夜郎國、今の貴州省野西境にいた未開部族が自分の國が一番大きいと思つていたことによる、その王。自みづかより、から。大おほ大きい。頃者けいしや「この頃、此の所。復またび」再度。諸互市しよごし「諸々の通商。入堂いりどう」堂に入る、江戸城中に登る。實じつに「洵に、真に。危急存亡きんきそんぼう」存続するか亡びるかが決まる大事なとき、秋は成熟のときであるから、大事な時の意、諸葛亮の出帥の表。曹そう曹操、感激かんげき「心に感じて奮ふるい立つ、また人の心を奮ふるい立たせる。奮ふる励れい」奮ふるい励れいむ。節磨せつま「節操を磨く。行おこない、行動。王愷おうき」盛んな敵愾心。醴泉れいぜん「甘酒、甘い水の出る泉。甘泉。芝草ししやう」芝や草。擇たくさず「選えらばず、選えら択。苓州れいしゅう」天草。僻陋へくれう「土地が片田舎で風俗が田舎じみている。一小島いせう」一つの小さな島。卓偉たつゐ「ずば抜けて優れている。奇傑きけつ」珍めづしく優れた人、とつても優れた人。振しん励れい「振しんるい励れいむ、奮ふるい励れいむ。土氣しき」戦士の元氣、意氣、氣風、武士の氣風、侍氣質。斯言しげん「この言葉、これらの言語。義形ぎけい」借り物の形、形骸、形だけ。慨然がいぜん「憤いり嘆なげくさま、悲しみ嘆なげくさま、感慨、慷慨、憤い憤い。誦しう」誦しうし、唱える、暗誦。自励じれい「自らを励むまし。遂ついに」終しまわりに。贈おくるり「贈おくる呈。天下てんか」國中、世界、天と地。

余蚤聞豐之日出有西嶠先生者博雅君子也及得其文集而讀之壯其文辭而想見其德望欽慕仰止欲一謁之者久矣戊午之春余遊鎮西則先生墓木既拱矣以此行之不及其在世為憾也及至東肥見一少年於鞞邨書屋於稠人之中眉宇清秀顏色皙白骨相不凡余奇而問焉則曰姓帆足名天民後豐之人也予怪而謂曰莫是西嶠先生之族耶曰然僕其義子也一日以其文稿請余一言受而閱之其文雄壯渾厚可觀乃謂之曰嗚乎何其文之似西嶠先生也螟蛉之似蝶蠃君之謂也余欲見先生而不能命也而与君萍水相遇亦命也有意于見而或不得見無意于見而或不得見無意于見而或得見嗟乎天地之間何其事皆出于意料之外耶雖然偶然相遇而得先生之後抑亦奇矣余雖不得見先生然得見其後亦幸矣愛人者及屋上之烏況君非屋烏乎君妙齡而儁才自今以往學日進德日成其所底止未可知也其不隕箕裘之業也必矣余既欽先生之為人又奇君之才於是乎書

釈文

帆足子徳文稿後に書す

余は蚤(そ)夙に、早くより()に聞(き)く、豊(ほう)の日出(ひ)に西崎(せいざき)先生(せいせん)有(あ)り、博雅(はくが) (学問(がくもん)が博(ひろ)く行(い)いが正(ただ)しい) 君子(くんし)なり、及(およ)んで其(その)文集(ぶんしゅう)を得(え)て之(その)れを讀(よ)む、壯(さか)んにして其(その)文辞(ぶんじ)に想(おも)いを見(み)る、其(その)徳望(とくぼう) (徳(とく)が高(たか)く人望(じんぼう)がある) 欽慕(きんぼ) (敬(や)い慕(ぼ)う)の、止(とど)めて一(いち)謁(やく)する久(ひさ)しきかな、戊午(ぼ)の春余(はる)は鎮西(ちんせい)に遊(あそ)び先生(せいせん)の墓木(ぼぼく)既に拱(きょう)なり (亡(な)くなられて既に年月(げんげつ)が経(た)ること)、此(こ)れ行(い)くに及(およ)ばず其(その)在世(せいせい)憾(うら)むを為(な)して、東肥(とうひ)に至(いた)るに及(およ)び鞞(いそん)邨(そん)学舎(がくしゃ)に一(いち)少年(しょうねん)を見(み)る、稠(お)い人(ひと)の中(なか)、眉宇(びいう)清秀(せいしゅう)顔色(がんしき)皙白(せきぱく)骨相(こつそう)凡(ぼん)にあらざ、余(よ)は奇(き)しくも問(と)う、則(すなわ)ち曰(い)う姓(せい)は帆足(ほあし)名(な)は天民(てんみん)と曰(い)う後(ご)豊(ほう)の人(ひと)なる、予(よ)は怪(あや)みて云(い)うに、是(こ)れ西崎(せいざき)先生(せいせん)の族(むぢ)やも曰(い)う僕(わが)は其(その)義子(ぎし)なりと、一(いち)日(にち)請(こ)う閱(み)て是(こ)れは其(その)文(ぶん)は雄壯(ゆうそう)渾(こん)て厚(こ)く觀(み)る可(よ)し、乃(すなわ)ち之(これ)れ西崎(せいざき)先生(せいせん)に似(に)たる、螟蛉(めいれい)これ蜾蠃(から)に似(に)たる (蜾蠃(がら)が青虫(せいちゅう)を捕(と)つて運(た)んで自(みづか)己(こ)の子(こ)の餌(え)にするの昔(むかし)の人(ひと)は、その幼虫(ようちゅう)を自(みづか)己(こ)の子(こ)として育(そだ)てると想(おも)つたので言(い)う螟蛉(めいれい)子(こ)) 君(きみ)を謂(い)うなり、余(よ)は先生(せいせん)を見(み)えんと欲(ほ)すれど能(よ)はも、運命(うんめい)なる君(きみ)ととも(とも)に萍水(へいすい)相(あ)逢(あ)う (浮(う)き草(くさ)が水(みづ)のまにまに漂(た)うようの意(い)で、人(ひと)が偶然(ごうぜん)に出(い)会(あ)うたとえ) も亦(また)た運命(うんめい)なり、意(い)有(あ)りて或(ある)は見(み)るを得(え)ず、意(い)無(な)きして見(み)えて見(み)るを得(え)る、嗟乎(さあ)、天(てん)地(ち)の間(ま)何(なに)ん

ぞ其の事は皆干意、料らいの外を出するや、然るに偶然と雖も相過ぎる先生の後に抑も奇なり、余は先生に見えずと雖も然るに見えるを得たりその後亦た幸いにも、愛する人は屋上の烏に及ぶも況んや君は屋上の烏に非らず、君は妙齡にして儁才（才能に優れた人）今より以て往學日進徳日其の所成す底止（留まる）未だ知し可し、其れ隕ず箕裘（父祖の業を見習って受け継ぐこと）の業必ずや、余は既に先生に欽みてこれ人の為す又君の才に奇しくも是れを書す。

語釈

帆足子徳ほあししとく 日出藩、家老帆足万里の養子。文稿ぶんこう 文の草稿。蚤ちゆう 蚤は速いから転じて、早くから。以前いぜん 豊ほう 豊後。日出ひで 日出藩。豊臣秀吉の正妻ねねの方の甥木下家が初代藩主。西嶮さいけん 帆足万里。博雅はくが 学問が廣く、行いが正しい、またその人。君子くんし 才徳がある人。文集ぶんしゅう 一人或いは数人の文集を集めた本。文辞ぶんじ 文章の中の言葉。壮まう 雄壮。徳望とくぼう 徳が高く人望がある。欽慕きんぼ 敬い慕つ。想おも 思い。一謁欲いちやくぼく 一見会いたい。戊午ぼし 安政五年、いち八五八。鎮西ちんせい 九州。遊ゆう 訪れる、旅、行く。墓木ぼぼく 墓に植えた木。拱きゆう こまぬく、両手の指を組み合わせ敬礼する墓木既に拱なり。墓に植えた木が一抱えほどもあるに感じになったの意、人が死んでから多くの年月が経たこと。行な 行い、行く。旅。在世せいせい 生前。憾かん 遺憾、残念。一少年いっしやうねん 一人の少年。鞆邸たぬてい 木下鞆邸。書屋しよおく 学舎。桐人ちゆうじん ぎつしりと集まっている多くの人。多くの人が集まっている席。眉宇びゆう 眉の辺り、顔の中で眉の位置が、家での宇、軒、にあたるからいう、顔かたち。清秀せいしゆう 顔かたちが清く秀でている。顔色がんしよく 顔の容色。皙白せきぱく 明らかに輝く、はつきりしているさま。骨相こつじやう 骨組みの現れ、骨組みに現れた、二位の性格や運命、主として顔や頭の形についていう。凡ぼん 平凡、全て。奇き 珍しく不思議。焉えん

「いづくんぞ、なんぞ、これ、ここに。東肥とうひ東肥後。曰いわく曰いわく述のべる。帆足ほあし姓な。名な天民てんみん。後豊ごほう豊後。怪あやしみ訝しり。雄壮ゆうちゆう雄大で壮大。渾こん身み奮ふんつて、全ぜんて。観みる見みる。乃なこそこ、すなわち。螟蛉めいれい青虫、蛾かの幼虫、養子、じが蜂かが青虫を運たんで幼虫の餌にするのを見て昔むかしの人は幼虫を自分の子として育てると思おもったので云いう。蝶かが蜂か、継つぎ、螟蛉子めいれいに通とず。似にる似にている。謂いつ云いつ、述のべる。与よ共に。萍水へいすい浮うき草、水草の一種。命めい運命、天命。料はかる推量、計はかる、図はかる。耶やや、か疑問、反語、感嘆の意を表す助字。偶然ぐぜん偶々、予期しない。相遇あひあい会あい会あつ。雖い唯い。然しかり其そのの通り。屋上うゑの鳥う屋根うゑの上の鳥、鴉あ、ある人に対する愛を他に及およぼすこと。況あ況あ、どうして、いわんや。屋あ家あ。妙齡なづり年頃、年若としわかい。偶才しゅさい才能に優れた人。自よ自よから、より。日進にっしん日に日に進む。徳日とくじつ日に日に徳を積たむ。隕おちず墜おちちない。箕裘きしゅう箕はまめがら、荻あしに似た草の一種、昔むかしえびらを編あむ材料、裘あは皮衣、獸類じゅうりゆうの皮で作つくつた着物、皮衣かわいを着きる。業ぎょう学業、欽きん敬けいつ。奇き珍めづしく不思議な、優あれる。才さい才能。

38 送川子道之長州序

周南之山。迤邐而達於赤關。是毛利公之所有耶。余之游鎮西也。植筇而望之。謂然而嘆曰。元就公之起安藝也。提三尺劍。略有十有三州。關西風靡。可謂盛矣。然金甌反落至賤至微擊鞋奴之手矣。公之子孫。其所有。獨如此耳。而豐公亦安在哉。嗚乎。貴賤貧富壽夭盛衰。皆有天數存焉。非人力之所能為也。夫以區々之力。欲與造者爭。豈其非惑之甚矣耶。人皆有貴於己者。弗思焉耳。富貴不能淫焉。貧賤不能移焉。威武不能屈焉。是以。能泥塗軒冕。蔽屍天下也。文曰。確乎不可拔者。潛龍也。丈夫至乎此。可以稱英豪矣。滔々天下。遺手內而殉手外。亦何心哉。川子道。遭世罔極。大不得志於當世。子道之趣長門也。有若不憚然者。故吾道天之數道之理。以告之。且賦詩以為贈。

其辭曰

世溷濁兮麟鳳藏。時否塞兮鳴梟翔。澆季世兮不可居。高其事兮葆而光周之山兮多靈藥。未以餌兮可制魄。周之水兮多錦鱗。釣而游兮孔之樂。早歸來兮碧山阿。吾教女兮紫芝歌。

時年三十二

川子道せんしどうを長州ちやうしゅうに送るの序

周南しゅうなんの山は迤邐いりして赤關あかせきより達す。是れ毛利公の有する所なり。余の鎮西ちんせいに遊びあそ箆つえを植りて之れを望み。謂然ぎぜんとして嘆んず。元就公の安藝あきを起す、堤三尺の劍は略ぼ十有三州有り。關西風靡盛んに謂おもう然るに金甌きんおう反落して賤はずかしきに至りて拏獲鞋奴たかくあんどの手。公の子孫其の有する所獨り此の如し。豐公も亦た安在なる哉。嗚乎。貴賤貧富壽夭盛衰みな皆天の數ほど存す有り。人力の能はたらきに為すに非らず。夫れ區々の之れ力を以て。造物に争そわんと欲す。其の惑の甚だしきは人皆己おのれを貴ぶ。思つてはならないことは。富貴淫りに能よくせず。貧賤移すを能わず。威武いぶに屈するを能わず。是れ以て能よく泥を軒冕けんべんに塗る。蔽くつて天下を雇くする。文に云う確なるは抜く可らず。潜龍丈夫これここに至りて英豪と稱す以てす可し。滔々遺とうとうして手の外

に殉したがうは亦た何とんな心哉。川子道世せむしの罔極いりやくに遭あい大きな志を当世たうせいに得えず。子道しだう之れ長門ちやうもんにき。不憚ふはんのごとく然りあらば故に吾が天の數道の理を以て之れを告ぐ。且つ詩を賦して贈と為す。其の辭ことこ

世溷濁兮麟鳳藏

世は溷濁こんたくして麟鳳りんほう藏かくる

時否塞兮鴟梟翔

時に否塞ひひかく 鴟梟しきょう翔かける

澆季世兮不可居

澆季たうしの世には居するは可かからず

高其事兮葆而光

高く其の事 葆光ほうくわうする

周之山兮多靈藥

周しゅうの山 靈藥れいやく 多おほし

未以餌兮可制魄

未ま以いて餌じし魄はくを制せいし可かし

周之水兮多錦鱗

周しゅうの水には錦鱗きんりん 多おほし

釣而游兮孔之樂

釣あそりして游あそぶは孔子こうしの樂がくしみ

早歸來兮碧山阿

早く歸り來たれ碧山へくさんの阿あに

吾教女兮紫芝歌

吾は女に教む紫芝の歌

時年三十三

語釈

川子道せんしどう 人名。長州ちやうしゅう 長門ちやうもん 周防の二州しゅうなん 周南しゅうなん 周防の南 逆邊いり 曲がりくねつてるさま、小さく連なるさま。赤關あかぜき 赤間関、下関。鎮西ちんせい

筑紫ちくし 九州。游ゆう 旅をする、遊ぶ。筇きやう 杖に適した竹、杖。謂然いぜん 嘆く、嘆息するさま。安藝あま 広島県、安藝あま 備後の二州。風靡ふうび 風が草木を靡か

すように、靡き従わせる、風が靡く。金甌きんおう 金を入れる瓶、秀吉の馬印し、金の瓢箪。貴賤きせん 貴人と賤人。貧富ひんふう 貧者と富める者。壽夭じゆうよう 長寿と夭折。

盛衰せいすい 栄える者と衰える者。賤せん 卑賤。微孽びだ 小ざくとらえる。鞋奴けいど 草履取り。威武いぶ 武力、威力。潜龍せんりゆう 潜んで未だ天に昇らない龍、天子が未だ

位に就かない時の称、未だ世に出ない大人。英豪えいごう 優れた人物。滔々たうたう 洋々、水が広く沢山あり。屍し 沓、履き物。鞋げい 草鞋。奴ど 奴。殉じゆん 國や主君

の為に命を捨てる。長門ちやうもん 長門。罔もう 網をかけるよう法律で罰する。憚然えんぜん 喜ぶさま。溷濁こんだく 混沌と濁る。麟鳳りんほう 麒麟と鳳凰、極めて立派な人物。藏ぞう

す 收藏、持っている。鳴臬しやうしやう 臬、凶悪な人のたとえ。翔しやう 飛翔、飛ぶ。澆季せうき 人情、風俗の軽薄になつた末世。葆ほ 草が茂る。靈藥れいやく 靈験あらた

かな葉。周しゅう 周防。未以らい 未を以て耕す。餌じ 食べる。魄はく 魂。錦鱗きんりん 魚。游ゆう 旅をする、遊ぶ。孔こう 孔子。碧山へきざん 緑の山。阿あ 隈。隅すみ 紫芝 長生

きの仙薬。